ア(彌尸訶 Messiah)の降誕せる地より來れり、其地名をベッレム(拂菻)と呼ぶ、これ既に大秦として汝等に知られたるところなり」と、これ大秦と拂菻とか隋唐に於て異名同義となるに至りし所以にして、唐時代に於て佛陀の生地たる「摩訶陀」の名が、印度全體の代表的名稱たりしと異らざるなりと。

以上はヒルト教授の主張にかゝる拂菻ヘッレヘム説の大要なり。

第三説は、我が白鳥文學博士によりて主張せらるゝものにして、實に第一説及第二説の弱點を指摘し、大秦は埃及文明の國を指すもの、其首府として漢史に掲げられたる安都城はアンテオケにあらずして「アレキサンドリヤ」なり。又拂菻はローマなり。ローマが Urum となり。Urum が Butrum となり Butrum か Butlin となれるものなりと斷定せられ、博引旁證大に其主張を闡明せられたり。(史學雜誌第十五編第四號、第五號、第八號、第十號、第十一號)

白鳥博士は隋時代の史料に見えたるは其儘書き記したるものとし、唐時代に於ける拂菻國に關する第一史料として高仙芝に從ひ、Talas 河上の役に加はり、西暦七百五十一年より同七百六十二年まで十年間大食に留り、七百六十二年廣東を經て歸國せし杜環の經行記を掲げ、これを參考として「隋代の拂菻國はコンスタンチノープルを都としたる東羅馬帝國を指したると明なり」と斷定し、且つ「ヒルト氏は此拂菻をシリヤ及び小亞細亞に限りたれども、余輩は歐洲のバルカン半島を含めるものと見るなり」と附言せられたり。然り而して、其拂菻の字義につきては、實に左の如く結論せられたり。曰く、

「然らば拂菻の名は何に原因するかと云ふにトルコ諸族はローマをウルム Urum と稱したれば、拂菻はその音譯なるべし、ウルム(Urum) は、ロム(Rom)の轉訛、又此ルムはペルシヤ人、アラビヤ人がローマを呼ぶ名也。(中略)ウラルアルタイ語系に屬する民族の中に、トルコ・蒙古・滿洲・朝鮮・日本にては、R音を以て言葉の始音と爲すを忌むが故に他國語のR音を以て始まるものにはA、U、O等の母韻を加へて發音の便を謀ること其例に乏しからず。(中略)さて漢人は突厥の如きウラルアルタイ民族よりウルム Urum の名を聞き、之を Butlim 拂菻の二字にて譯せるなるべし。漢人が外國の名稱を譯する方法を見るに、外國にてO、U、Aの母音を以て始まる名稱を譯する際には、Wo. Ho. Ha 等の如き輕き子音を有する文字を取りて使用する例多し。(中

略支那人かUrumのル音を譯する時に拂菻の拂(But)或(Wut)兀菻の兀(Wut-Hut)を採るも此の理に基く譯法と知るべし」と。如此白鳥博士は、拂菻がRomより出てUrumとなり、ButrumとなりButlimとなりたるなりと主張せられたり。

第四説はドキヌ、フォン、モルレンンドルフの兩氏によりて主張せられたる拂菻フランキ説なり。されど、此説の誤謬にして採るに足らざるは、ヒルト教授の既に説明せるが如く、フランク(Frank)の名が歐洲諸國の名稱として東洋に知られたるは、第十世紀以後のことに屬す。されば第七世紀の前半期に於て史書に見えたる拂菻國を以てフランクなりと斷定しがたきは、勿論なれば、茲に詳述せず。

それ如此く、拂菻の字音字義に關して諸説紛々たるものあるも、大體に於て最も有力なるは、ヒルト教授のベツレム説と白鳥博士の東羅馬帝國説との二説に外ならず。然り而して、吾人を以てこれを見れば、四説共に當らざるは一也。勿論吾人後學の徒濫に先輩諸氏の高説を批難すべきにあらず。吾人は我が白鳥博士やヒルト教授の博識と慧眼とに敬服するものなり。しかも、それ等の大諸家が其結論に達せんとすることに急なるが爲め、其有せし史料を充分に活用せずして止みたるものあるは、吾人の竊に諸大家の爲に之を惜みて止まざるところなり。

果して然らば、此等諸大家の慧眼を逸したる史料とは何ぞや。曰く大秦景教流行中國碑側面の人的固有名詞の研究これなり。此等の諸大家にして景教碑文を利用せざるものなく、各々「按西域圖記及漢魏史策、大秦國南統珊瑚之海、北極衆寶之山、西望仙境花林、東接長弱水」の諸句を引用せざるもの一人もなし。就中白鳥博士の如きは其解釋に於て、ヒルト教授やレツケ博士の右に出でられ、吾人を裨益せられたること多大なり。然るに白鳥博士を始とし、ヒルト教授等が碑文にのみ注意して、碑石の側面に在る七十有餘の景教宣教師の姓名を視察することを忘却せられたるは何ぞや。蓋し吾人はヒルト教授や白鳥博士にして苟も景教碑石側面の固有名詞を瞥見だにしたらんには、到底逸し難き直接史料の存在するものあるを確信すれば也吾人が認めて以て其側面の直接史料とするものとは何ぞ。曰く「僧拂林」の三文字とこれに對照せられたるシリヤ文字これなり。(三省堂出版日本百科大辭典三卷千〇八十頁景教碑側面の上部及ひ羅玉振著敦煌石室遺書參照)

吾人始め此碑石の固有名詞たる僧拂菻に接し、百餘年五里霧中に彷徨せし拂菻問

題に對して、暗夜に燈火を得たるの感に打たれ、縹かに思へらく、唐の建中二年即西曆七百八十二年の古文書たるこの碑石に、拂菻と云ふ人的固有名詞あり、又舊唐書によれば貞觀十七年西曆六百四十三年に當り、拂菻國來朝の紀事あり、一は人的固有名詞にして他は國的固有名詞なり、而かも其固有名詞たるは則ち一なり。然り而して、其時代の點に於ても、一は第七世の中葉に屬し、一は第八世紀の末葉に屬す。其相去ること百五十年を出てず。字音の研究を遂行するに於ては蓋し無二の好材料たらずんばあらずと、直に其「僧拂菻」に對せられたるシリヤ文字を讀むに至り、舊來の疑團を氷解するを得たるものあり。これ吾人が敢て先輩諸氏の所說に異議を狹むに至りたる所以なり。この材料を以てするも、尙且つ吾人は拂菻を以て白鳥博士の如く羅馬なりと推定し、若くはヒルト教授の如く「ベツレヘム」なりと臆測せざるべからざるかは吾人が以下讀者の判斷に一任するところ也。

抑も景教碑側に於て「僧拂菻」に對してシリヤ語ܦܪܝܣܛܘܢを充てたり。これ「長老フリム」なり、長老とは景教は勿論基督教會に於ける僧位なり、希臘語の(Πρεσβύτερος)の變形にして、これに對しては支那唐代の文字として「僧」を充つ、固より正當なり。而

して本論に大關係ある「フリム」Phrim に對しては「拂林」を充てり。由是觀此拂林の二字は「フリム」若くは「フリン」の音譯なりと知るべき也。吾人の研究するところによれば、景教碑右側面の固有名詞七十餘名中二人の「フリム」長老あるを見る而して一人に對し僧拂林の三字を充て、他の一人に對して僧玄德の三字を充てゝ拂林を充てず、拂林は「フリム」の音譯にして、玄德は「フリム」の意譯なりと知る。換言すれば「玄德」は深遠の道を示し、又は淸善美の德行を示す文字なり。これ實に宗教家が理想とすべき深遠の道に活歩し、淸善美の德行を積むことを期する所以を示すに足る文字なり「これを「フリム」と云ふ原語が「物の豐穰ならんことを希ふと云ふ意義なるより推定すれば、僧として淸善美の德行の豐穰ならんことを希ふの念より原語の「プリム」に對して「玄德」の二字を充て、暗に「玄德フリムなれかしとの意を表示したるものなるべし。これ吾人が玄德を以て「プリム」の意譯なりと云ひ、拂林を以て「プリム」の音譯なりと云ふ所以也。抑もシリヤ語の「プリム」は希伯來語のパーラー פרי「豐なれ」の動詞より出てたりと云ふ、希伯來語に於ては「パーラー」と云ふ動詞が名詞となるときは「果實」即ち「プリイー」פרי と云ふ單數形をとり、複數の時は「プリイム」となり、更

に此プリイムを人的固有名詞とするに當りては、其前に「イ」字を加へ「イプリイム」として、三人稱男性を示すことゝなれり。例へば、今日の所謂イスラエル民族の固有名詞に付てこれを説明せんか、「サーラー」(競ふ)と云ふ動詞に「エル」(神)と云ふ名詞を合して先づ「サーラー、エル」なる名詞を得、これに「イ」の第三人稱男性の印を付し、「イ、サーラー、エル」(神競ふ)と云ふ名詞を得、これを固有名詞とするが如し。其他「イサク」と云ふ固有名詞は「サーク」と云ふ動詞より出てたる名詞にして、「イ」を付し「イ、サーク」(彼笑ふ)となるも皆同一の理なり。然るに希伯來語の「イフリアム」が、シリヤ語となるに當りては、文典上の記號とも云ふべき「イ」又は「エ」の前頭音を付せずして「フリアム」「フリム」となりしものにして、是前頭音の「イ」が元來「バーラー」と云ふ語に固有のものにあらざるに由ると知るべし。されば「拂林」に對して充てられたるシリヤ語の「プリム」は、希伯來語の「イプリアム」(אפרים)に外ならずして、實に今日の英語にて「イフライム」Ephraim 獨逸語の「エフレム」Ephrem なりとす。換言すれば「拂林」は「フリム」と云ふシリヤ語の音譯にして、そのシリヤ語は希伯來語の固有名詞たる「イフリム」即ち(エフレム)と同一なり。共に(豐穰)を意味すと云ふに在り。故に景教碑側面の僧拂林とは、現代の基督教會の用語に從へば「宣教師」「イフライム」長老」と云ふに外ならず。若し夫れ「僧拂林」にして長老「イフライム」なること此の如く明瞭なる以上は、論理上自然の結果として、所謂拂菻國も亦た「イプライ」ム國なりと論斷せざらんと欲する得べからざる也。漢字の拂菻と拂林との差異の如きは苟も漢音に差異を生せざる以上は、これを同一と看做して可なりと信んず、況んや、拂菻國に對しては「拂懍」あり、拂菻あり又敦煌遺書に遏拂林あるに於てをや、論じて茲に至れば拂菻はヒルト教授の所説の如く、ブトリン(Butlin)の音譯にもあらず、又白鳥博士の主張せらるゝが如く、ローム Rom Urom の轉訛にあらず、又近頃佛のシャウンネーが主張せるが如く、ポリン *Holin* の音譯にもあらざること明なりと信んず然り而して、舊唐書にある「隋煬帝常將通拂菻竟不能致貞觀十七年拂菻王波多力遣使云々の紀事に於ける拂菻王とは「イフライム」王、なりと斷定することゝなるべし。果して然らんには所謂「イフライム」國とは如何なる邦國を指稱するか、其王波多力とは果して何者なるか、これ吾人が次に決すべき問題なりとす。

「波多力」の意義に關しても、學者の所說一定せざること拂菻の問題に劣らずとす。

第一說は「波多力テオドル」說とも云ふべきか、佛のクラプロートによりて主張せられたり、其理由とするところは、希臘語のθ thは時にφ phの音を發することあり、例へば、ロシヤ人が Theodor に Pheodor と發音するが如し、故に波多力(Potolih)は(Pheodor)の音譯なり」云々と、佛國の東洋學者Pauthierも大體に於て此の波多力テオドル說に贊したり。

第二說は「波多力即ちパトリアーク說にして、ヒルト敎授によりて主張せられたり其說に曰く「波多力(Potolih)の古音は(Bat-ha-lik)なり(Bathric)と云ふアラビア語の支那音譯なるべし、Bathrick 若くは(Bathriark)はアラビア、波斯土耳古等の諸語に於て Patriarch を稱するものなり」と(大秦全錄二九四、二九五頁)

第三說は、白鳥博士によりて主張せられたる波多力即ちパトリス說あり。博士はデルベロー D' Herbelot 氏の東洋研究を根據として「アラビヤ人は Patrice を Bathrik と云ひ Patriarch を Bathriark と云ひ、此兩名稱の音聲甚だ相似たれども、其意味は全く異れり、されば Batric はローマのパトリス Patrice の訛れるにて、古にありてはプ

レス(平民)に對するローマの貴族を謂ふ名なりしが時代の經るまゝに特に(內亂以後)其數大に減少し、共和政府の末期に至りて、僅に五十家に過ざりき。是に於て、カエザル及アウグストは貴族の生にあらざるも、殊功ある者のみにパトリスの榮爵を與へしかば、其意義全く古のものに異るに至りぬ。コンスタンチン大帝が皇帝の威嚴を盛ならしめん方便として、數多爵位を制定せし時に當り、パトリスは一代限の榮爵となり、(Illustres)品等の中に位し、コンスルの次に列せられたり、アルメニアのパトリクは即ちローマのパトリスなるべし。されば唐書の拂菻王波多力とあれども、實はローマ領たりしアルメニヤの君長の爵名にして、ローマ皇帝を指したるにあらず」とは、白鳥博士が史學雜誌第十五編八三四頁に於て明言せられたるところなり、知るべし、波多力問題に關しても最も有力なるは白鳥博士の所說とヒルト敎授の所說なるを、然り而して、一は「波多力」はパトリスに出つとし、一はパトリアークに出づと云ふ、一はこれを以て羅馬の爵位なりと云ひ、一は宗敎上の總管長の意義なりと云ふ而して、一は大秦を以て埃及文明の國なりとし「安都城」とはアレキサンドリアなりと主張し、一は大秦を以てシャリの羅馬領なりとし、安都城を以て「アンテ

オケなりと推定す、更に一は拂菻は羅馬なりと主張し、一はベツレヘムなりと云ふ、畢竟根本問題たる拂菻の字音字義の解決せざるか爲め、波多力問題が解決せざる所以なり。吾人は拂林を以て「イプライ」ム國なりと主張するものあり、波多力問題に關して自ら獨立の立脚地を有すこれ亦止むを得ざる也。

吾人は遺憾ながらこの點に關しても亦我白鳥博士の所說に反對するものなり、蓋しアルメニヤ王が羅馬の爵位を授けられたるや否やの史蹟極めて不明なるは慥に其一なり、假にアルメニヤ王に羅馬の爵位を授けられたるの事實ありとするも此の如き爵位が當時のアルメニヤ地方に於て外國にまで傳へらるゝ程重要のものなりや否やは疑問なり、これ其二なり、實に博士の云はるゝが如く、波多力をアルメニヤ王なりとすれば、即ち拂菻はアルメニヤとなり、博士の主張せられたる拂菻ローム說を如何にして調和すべきか、これ第三の疑問なり、吾人は「波多力」の字音に關してはヒルト敎授と共にバトリアーク說を主張せんとす、只夫れ其理由に至りては、ヒルト敎授と同一ならざるものあり、吾人が「波多力」を以て「バトリアーク」の音譯なるべしと主張する理由は全く拂菻イプライム說に基くものにして、イプライムの歷史に根據を有するものなり。請試に吾人の信ずる所を開陳せん。

これを舊約聖書及び希臘羅馬の古文書に考ふるに「イフライム(Ephraim; Ephrem)」と云ふ固有名詞を有するものは、第一にヨセフ(Joseph)の幼子なり、第二はこのヨセフの幼子の子孫と看做されたるイプライム民族の名稱なり、「イプライム」民族とは、即ち希伯來十二民族の隨一なり、舊約聖書に據れば、希伯來民族が埃及の地を脫出するに當り、イフライム民族の總數四萬〇五百餘人を算したるも、其全くパレステイン(Palestine)移住することを得たるものは、八千餘人に過ぎざりしと云ふ。然り而してこの八千餘人の占領せし地は、サマリヤ Samaria を中心とし、次第に東北に發展しシケム(Shechem)を以て其首都とし、ヨッパ(Joppa)の港口によりて地中海に連絡し陸路シリヤの大都會なるダマスカス(Damascus)及びアンテオケ Antioch(ヒルト敎授の所謂安都城)に達し、其固有の文明に加ふるに、希臘羅馬の文明を吸呼同化することを以てし、後世の所謂イスラエル王國なるもの組成せしものは、此「イフライム」民族を中樞とするものなり、これ今日に於て「フフライム」と云ふ語「イスラエル」民族全體の稱となりし所以なり。世人稍もすれば、猶太(Jews)とイスラエル(Israel)とを混同

するも、兩者同一にあらず、均しく希伯來十二民族の一派なれども、猶太とはユタJuddah民族によりて代表せられたるもの、北方に在るイスラエル民族に對してこれを南方希伯來人民と云ふべき也。其首府は有名なる「エルサレム」(Jerusalem)城なり。これに反して、イフライム即ちイスラエル民族に取りてはエルサレムに匹敵するものなく、エルサレムは依然として十二民族の大首府なりき。紀元前七百五十九年の頃アッシリヤ大王チクラスピレサー(Tiglath-pilesar)の爲に捕虜となり、メソポタミヤ(Mesopotania)の原野に送られたるは即ちこのイフライム民族なり。更に紀元前七百廿一年再び捕虜として遠くメデヤ(Medea)の山野に送られ、或は波斯の平原に送られて、牧畜耕作に從事し、漸次諸方に分散せられ、西洋史家の所謂「十民族失踪」を演出したるは猶太人にあらずして、此「イフライム」民族を首とせるイスラエル人民の行方不明を意味するものあり。故に皮相の觀察を以てすれば、紀元前第七百二十一年以後、今日に至るまで此地球上に於て「イフライム」王國あるものなく、從て第七世紀の頃に當りて拂菻國王波多力なるものあるべき理由なきが如し。オックスホード大學教授ローリンソン博士嘗てこのことを論じて云へることあり。曰く、

「希伯來十二民族中イスラエル王國に屬する所謂十民族が捕虜となりて、メソポタミヤ及びメデヤ、波斯に散在するに當り、最初より團體即ち民族的團體を形作りて存在せしことなく、全く個々分散せしめられ、殆んど孤立の狀態なりき。是を以て、其子孫は或は周圍の異人種と雜婚して吸收同化せられたるもの多し。勿論或者はゼルバベル(Zerubabbel)及ひエズラ(Ezra)の徒を中心として小團體を爲したれば、其本國に歸るに及び、これに從ひて、再ひバレスステナに復歸したる者あり、或は以前よりメソポタミヤ地方に存在せしユタ民族の團體に加入し終りたるものありと雖も、之を概言すれば、今日に於て所謂失踪せるイスラエル十民族の子孫のみにて成立する國民を發見せんとする事難かるべし」と。知るべし、史上未だ嘗てイフライム王國なく、從て拂菻國なるものなかりしことを、夫れ然り、然りと雖も、其セルバベル若くはエズラの徒と共に地方バレスステナの本國に復歸したるイフライムの舊地に於けるイフライム民族は如何になりしぞ、彼等か爾來依然として其團結を繼續し、ガリラヤの湖畔に在りて或時はバビロン王朝の支配を受け、或時はペルシヤに貢し、或時は希臘に屬し、最後に羅馬帝國の治下に歸しながらも、常に其地方的團結を

維持しつゝ、遂に紀元後第三世紀に至れるは爭ふべからざる事實なるが如し。蓋し第二世紀末の著者なるテルチユリアン(Tertullian)の紀事に基づき、スミス氏が其著古代史に述ぶるところは大に吾人の意を得たり。曰く、

イフライム民族の故郷たるガリラヤ湖畔の都會にタイベリアス(Tyberias)と云ふ所ありけるが、此都會に一の總管長(Πατριάρχης)あり、其部下の使徒を領内の各寺院(Μητροπολις)に派遣し、貢物を受け依然として、祭政一致の統治を行ふ、其權力實に世の王者に異らざるものあり。又遠く去りて、ユーフラタス(Euphrates)河の東方に住在する團體にありては、自ら「捕虜の君」と稱し隱然上古のダビデ王(David)を以て任する治者を頂くもあり。其民族より移住して遠く支那の領内にすら進みたるものありと云ふ」と(スミス氏上古史三卷五八七頁)

これ第三世紀頃のイフライム地方に於けるイフライム民族の狀態なり。羅馬帝國の隆盛なりし時代に於てすら、尙且つこの習慣的に隱然獨立王國を成すことありしを知らば、其羅馬帝國が第五世紀に於て滅亡せし以後の事情はこれを察するに餘りありと云ふべき也。

由是觀之ば、吾人が支那の史書に於て第七世紀の初に當り拂菻王(イフライム王)波多力(パトリアーク)總管長遣使の紀事に接するも、深く訝むに足らざる也。思ふに「イフライム」即ち拂菻國なるものは當時は勿論最初より國際法上の觀念に於て一個獨立の國として存在せしことなく、終始外國の統治權に服したるも、其民族の歷史と周圍の事情により、之を統治する外國の權力充分邊疆の地に及ばざるが爲め屢々自稱君長を生じ、自稱イフライム國即ち拂菻國なるものありしにあらざるか、西羅馬帝國滅亡後第七世紀に於ては、シリヤ地方に於ける東羅馬帝國の統治大に衰へ大食國の勢力未だ全くパレステナの山間僻地に及ばざるに當りては、パトリーアーク其虛に勢し、更に舊來の祭政一致の權力を振ひて以て自ら他國に對してイフライム王國即拂菻國を僭稱せしにあらざるか。西暦五百三十二年に於て支那の絹布を羅馬に輸入せしが、シリヤ、サマリヤ(これイフライムの地方)又ユダの番商(Caravan)たるを思へば、シリヤ地方の經濟的狀態は之を察するに餘りありと云はざるべからず。即ち其政治的に獨立國ならざることは、必らずしも、經濟的若くは宗教的交通に於て外國に對して獨立の稱號を用ゆるの妨げとなるものにあらず。況んや

イフライム民族の如く屢々外國に征服せられ、其いづれの國を以て宗とすべきかを知らざるものにして、しかも其宗教的確信に於て他を凌ぐの慨を有するものあるに於てをや。吾人を以てすれば、彼等か隋唐と交通するに當り、惋然小獨立國の體裁を持し、拂菻王國を稱し、波多力と稱へしは寧ろこの消息を傳ふるものなり。而してこれ實に舊唐書の紀事自大食强盛漸陵諸國乃遣大將摩搜、伐其都城、因約爲和好清、每歲輸之金帛、遂臣屬大食焉云々の紀事と合す。拂菻を羅馬としては此紀事を調和すること能はざるは學者の既に認むるところなり。この紀事の如きは拂菻か羅馬ならざることを以て最も大切なるものとす。これ吾人が白鳥博士の波多力パトリス說に從はずして寧ろヒルト教授のパトリアーク說に同教授と異なる理由を以て贊同する所以也。

夫れ然り、然りと雖も、拂菻(即ちブリュム)即ちエフライム國にして、波多力はパトリアーク即ち總管長なること明なりと雖も、其果してシリヤ地方の景教圖體なりしか將又イフライム固有の北方希伯來人種の圖體なりしや否やは吾人か次に大秦禹豆麻佐論を論したるものを參照して之を決すべきなり。

太秦(禹豆麻佐)を論す

(明治四十一年一月「地理歷史」)

佐伯好郎

支那文明の性質如何は上古の時代に於て其影響を蒙りたる大日本帝國の文明史を論せんとするもゝ造次顚沛だにも忘却する能はざる一大事なりとす然り而して我帝國の指導者たりし支那は漢、唐の時代に於て既に印度、シリヤ、パレステナ地方と交通し歐亞の文明が早く天山の南北兩路より流れて長安の地に注き來たりしも亦爭ふへからざる事實に屬す、されは今や支那文學に現はれたる大秦(タイシン)とは如何なる國なるかを尋ぬるものあらば吾人はワイリー氏(Wylie.)ブリッジマン博士(Dr. Bridgman)及レッケ博士(Dr. Legge)其他獨逸人ヒルト氏(Hirth)等共に大秦(タイシン)とは羅馬帝國若くは少くも其帝國の一部たりしシリヤ(Syria)地方なりと答へんのみ然り漢魏兩書の所謂大秦王安敦使を遣はすとの記事の如きは歐亞陸上の交通か如何に久しき以前より行はれたるやを示して餘あるものと云ふべし。ドラークベリー氏(De Lacouperie)の如きは其二大著述たる支那文明論及支那古語文典に於て

支那文明を以て全然歐洲文明に影響せられたるものとなすに至る、其他外國の淸學者に於ても此の意見を有するもの甚多し、嗚呼支那文明は果して其源泉を歐洲文明に汲みたるか將又然らざるか、現今我國に於ける東洋史家多數の主張するところは支那文明を以て東亞固有、支那特獨の文明なりとするが如し、思ふに支那文明の性質如何は、我文明の性質如何に關係するところ至大なれば容易に斷定すべきにあらずと雖も支那文明を以て全然東亞固有、支那特有の文明にして毫も歐洲文化の感化を受けすとするは恰も日本文明を以て日本固有、大和民族特獨の文明なりとして毫も支那文明の影響を受けすと論するの類にあらざるなき乎

夫れ大和民族如何に秀優卓絕の天神種族なるにせよ又其言語か所謂亞爾泰山語脉に屬するにせよ屬せさるにもせよ有史時代に在りては大日本帝國の歷史は支那倫理思想の輸入と支那文字の輸入とを特筆大書し一點の疑を挾むことなからしむ、而して現在の事實は羅馬字論者か如何に論爭するも未た漢字を廢止するを許さす、國粹保存主義の日本人と雖も諸葛武侯孔明を以て理想的の人物と尊崇す、支那文物の吾人を誘導開發せる實に少々ならさるや知るへき也

思ふに國語の關係か血液の關係よりも强大なるか如く同文字同一倫理思想の關係は同人種の關係よりも强大なりとす、印度語と歐洲語とか所謂印度歐羅巴語脈を成す所以を證明せし言語學者は、劍銃を馬上に振ふて印度帝國を併呑せし勇者武夫若くは印度の內亂を鎭定せし大將軍よりも印度を英國に親服融和せしむるに於て其効遙に著大なりとす、英人ヘール嘗て云へるあり曰く「印度語を以て印度歐羅巴語の主に置き印度語も亦英語と同一人種の國語なることを明にされてより以來英國政府は年々二十萬人以上の精兵を印度に駐在せしむるよりも更に强く印度をして英國に服從せしむるに至れり」と我邦學者の參考すべき明言なり

今日の日本帝國が世界上に於ける位置と名望と信用とは假に我國に武士道なしと斷定するも將又我國の舊慣故俗が朝鮮の舊習慣習風俗に類するものありとするも毫も帝國現在の實價を損することなき也、曾に其實價を損せざるのみならず益々其眞價を昇騰せしむるに足るものあるを知る、視よ英國民の勢力と價値とは彼等の祖先か第五世紀の頃に於て露領バルチック海の半島スレスヴイックの一村落より出てゝ英國島に移住したる未開化人民なりしと云ふの故を以て其價値

を損せざるのみならず寧ろ一千四百年間に大英帝國を建立せしアングロサキソン人種の功勞は內外の均しく謳歌するところにあらすや吾人は斷言す、吾國の價値と勢力とは世界列國既業に之を認めさるなしされは吾人か吾人の最も榮光とする二千五百年の歷史上の年數を改算して之を二千年の史とするも將た日本歷史は任那征服に始まり、日本武士道は儒敎の惠與なりとするも又日本の商工業は支那朝鮮の歸化人種に負ふところ多しとするも毫も日本帝國の眞價を損することなく否却て出藍の名譽は吾人の頭上に歸すへきのみ、況んや如此ものか我對韓方針や支那人敎育上に於て非常なる利益あるに於てをや

「日韓清三國の古史を比較對照し仲哀帝崩去、應神天皇誕生の年を判定して晉の穆帝永和二年にして新羅の訖解尼師今三十七年、百濟の肖古王元年丙午、耶蘇誕生後三百四十六年なりと斷言す」(久米邦武先生日本古代史)されは吾人か太秦(禹都麻佐)の研究に於て最も大切なる弓月王歸化の年の如きは應神天皇の十六年なるを以て西曆三百六十二年に相當すとせさるへからす、又日本文明に大關係ある論語千字文の獻上は西曆三百六十二年以後に在りと云はさるを得す、而して此の二者は第四世紀の中頃に於て神功皇后の三韓征伐に依りて大和民族か亞細亞大陸に活動を始めし第一の結果なり、換言すれは吾人か支那文明に接觸するに至れるは實に此時に始まり、東亞同文の基礎茲に成り隋唐の時代に及ひて支那文化の勢力其極に達す、然かも支那か是れより先、陸路シリヤ、パレスチナ及印度、諸國と通商交通を爲し、其文物を輸入され希臘語より轉訛せし琵琶と云ふ語は胡琴、又は馬上琴として秦漢に知られ唐代に於てはオルガンか今や日本語となれると同一の程度に於て琵琶は支那語となれるなり、其他希臘語の葡萄の如きも紀元前二世紀に於て早く司馬遷の史記に用ひられたりとすれは神功皇后の三韓征伐は啻に大和民族を以て支那文明に接觸せしめたるのみならす實に世界的文明に接觸するの機會を捕へしめたる者とせざるへからず嗚呼神功皇后三韓征伐が帝國の將來に及ぼしたる影響測るへからざる也蓋し我國をして論語千字文によりて國字を得せしめ吾人をして國史を有せしめ一箇の國民とせしか如き、又秦民二萬人以上の歸化によりて我國物質的文明の進步に資するに至りたるが如きもの共にこの三韓征伐の直接の結果なれはなり而して吾人の太秦研究は實に此の二大結果の一を研

究するもの、實に帝國史乘の大問題なりと云はざるを得ず、蓋し去今千五六百年前の帝國に於て人口未た多大ならず、國粹未だ充分に發揮せざるのときに當り弓月王の人夫百二十七縣二萬五千人の歸化は明治維新の前後に約二十萬人の英米國人か一時に歸化して京濱間の地に住居するに至りたるに均しかるべき也豈帝國の歴史に影響する所なからんや然るに史家此の大々的の事實を輕々に看過し、其眞相を研究せんとせざるは、吾人の常に怪訝に堪へざる所也、嗚呼日本史上秦氏と稱するものは俗説の如く秦の始皇帝の子孫にして漢民とは漢の靈帝の裔孫なるか、秦氏とは辰韓若くは秦韓又は秦漢人民なりと云ふの外我國史家の研究は遂に進むべきにあらざるか、これ吾人か太秦の研究に於て論ぜんとする所なり

(1) 太秦(禹豆麻佐)とは何そと問ふものあらば吾人の答は種々なるべし、即ち京都府葛野郡太秦村と稱する一村落の名稱なりと答へ若くは雄略天皇の朝に秦氏に賜ひたる姓號なりと答ふるを得べし然り而して禹都麻佐とは如何なる意義なるか太秦の二字を訓讀して禹都麻佐と云ふに至りたる時代若くは理由に關して我國學者の敎權たる本居宣長先生(古事記傳だに「不詳」の二字を以て答へたるもの實に第二十世紀に於ける日本の學者の解答を待つ大疑問なりとす、是に於て乎吾人は先づ第一に禹豆麻佐と太秦との前後を決定し何時代に至りて始めて兩者の合體を見るに至りしやを決せずんばあるべからず、然かも吾人は我國の史籍か西曆第八世紀以前に遡るものなきを憾む、即ち吾人は第三四世紀頃の史蹟を論ずるに當り第八世紀に於て著述されたる古事記及日本書紀の二大著述以前に遡ること能はざるを憾むものなり、讀者幸に吾人か劈頭第一に日本書記を引用するを咎むれ勿れ、これ實に止むを得ざればなり、今謹んで

雄略紀を按するに

十五年辛亥、秦民分散、臣連等各隨欲駈使、勿委秦造、由是秦造酒、甚以爲憂、而仕於天皇、天皇愛寵之詔、聚秦民、賜於秦酒公、公仍現率百八十種勝、奉獻庸調御調(作物御調也絹絲充積朝廷、因賜姓曰禹豆麻佐(一云禹豆母利麻佐皆盈積之貌也)

との記事あり、事は西曆第四百七十一年に屬し世界文明の史蹟に大關係ある西羅馬帝國の滅亡に先だつ僅に五年の頃に當る、此時に當り前に諸國に分散せし歸化人秦氏を一所に聚集して之を秦酒公に賜ひて織業を興さしめたるの結果、調庸の

絹繰朝廷に充積し天皇に嘉納し給ひ禹豆麻佐の姓を賜ひたりと云ふ、吾人は第八世紀に於て日本書紀の著者か注解せるが如く禹豆麻佐は禹豆麻母利麻佐にして益積之貌也との說明に贊同するものにあらずと雖も禹豆麻佐なる四文字が早く既に西暦第四百七十一年の頃に現存せし事實を知るを得る也、若し夫れ禹豆麻佐にして雄略天皇の時代に始りしものとすれば太秦の二字か禹豆麻佐の訓讀を受くるに至りたるは確に雄略天皇以後とせざるべからず吾人は續日本紀第十四卷聖武天皇天平十四年の記事に

八月丁丑、詔授造宮錄正八位秦下島麿從四位下、賜太秦公之名並錢一百貫、絁一百疋、布二百端、綿二百屯、以築大宮垣也

を讀む、實にこれ唐の玄宗皇帝の天資元年安祿山か唐に勢力を扶殖し始めし年にして、正にこれ西暦七百四十二年雄略天皇の禹豆麻佐を去ること二百七十餘年に於て太秦の二字が日本史上に現はれたるを證明するものなり、しかも吾人は禹豆麻佐なる名稱が雄略天皇以後二百七十餘年間盛に用ひられて太秦公のときに至りたるを信ぜずんばあらず蓋し皇極天皇の時代の俗謠として日本書紀二十四卷

に掲げられたる歌に

禹豆麻佐波、柯微騰母柯微騰、枳舉曳但屢、騰舉預能柯微乎宇知岐多摩須母

とあり其前後を讀むに當時東國不盡河の邊に起りし一種の迷信を征伐せし秦氏の豪傑秦の河勝を賞讃せし歌なるや明なり、知るべし雄略天皇の時代を去ること約百七十年聖武天皇天平十四年に先つこと約百年の頃即ち西暦六百四十二年の頃に當り禹豆麻佐は歌はれるを、又知るべし、禹豆麻佐は名譽なる語として秦氏の豪傑を表はすに用ひられたるの故を以て吾人が雄略天皇の朝より聖武天皇天平十四年まで禹豆麻佐が不絕不斷人口に膾炙せしものと推定するに於て不可なかるべきのみならず更に吾人が太秦を禹豆麻佐と訓讀するに至りたるは聖武天皇天平十四年以後と斷定するも不可なるべし換言すれば禹豆麻佐は雄略天皇の時にありし語とするも之に太秦の二字を充つるに至りたるは天平十四年西暦七百四十二年に始まると謂ふべき也

夫れ如此く太秦、禹豆麻佐、共に秦氏の歸化人を表す語にして雄略天皇以來の古語なりと決定せんか次に生ずべき問題は今の京都太秦村の一帶は雄略天皇が秦酒

公に賜ひたる所謂秦氏聚集の居留地なりしか雄略天皇の所謂「分散二諸國一」の諸國とは如何なる國なるかの二問題なりとす、吾人は今の京都太秦の地方全體を以て雄略天皇の時代は勿論、動もすれば雄略天皇以前よりして秦氏居留地なりしとなし太秦村地方に在りし秦氏の勢力は平安遷都の一遠因なりしにあらざりしかを疑ふものなり而して所謂諸國とは畿内附近の諸國に外ならずと信ぜんとす蓋し和名鈔に攝津、河内、淡路の諸國に幡多郷あるを示せばなり然り而して第十世紀前後の日本文學にして京都を中心としたるものに於て太秦參詣の記事あるを知らば今の太秦か其第十世紀以前に於て京都市街西邊の名所たりしや明かなり然り而して日本書紀應神天皇の記事によれば曰く

十四年、足葛弓月(融通)君自百濟來朝、因以秦之、曰臣領已國國之人夫御財百二十縣而歸化、然因新羅人之拒、皆留加羅國、爰遣葛城襲津彦而弓月之人夫於加羅、經五年而襲津彦不來焉、

と又十六年の記事に

十六年八日遣平群木菟宿禰、的戸田宿禰於加羅、仍授精兵詔之曰襲津彦久之不還、必由新羅人拒而滯之、汝等急住之擊新羅、披其道路、於是木菟宿禰等進精兵、落于伽羅之境、新羅王愕之、服其罪、乃率弓月之人夫、與襲津彦共來焉、

と而して應神天皇誕生の年を以て西暦三百四十六年とすれば應神天皇の十六年は西暦三百六十二年となるべき也吾人は西暦三百六十二年に於て百二十七縣の秦民が襲津彦と共に五年の困難を新羅の野に嘗め萬里の風浪と戰ふて我國に歸化せしものなれば其一部が襲津彦の郷里たる葛城即大和の葛城の地にも分散されたることを想像するも決して不穩當の推測にあらざるべしと雖も當時今の山城の地にも分散せられたるを知る、啻に其れのみならず其後百餘年を經て諸國に分散せる秦氏一萬八千六百七十人を聚集せし地點が今の太秦村を中心としたる京都地方たるを知らば彼等が襲津彦の領分たる大和葛城に一部分を留置せしめ大部分を今の太秦に移せしや明なりとす、論じて茲に至れば今の太秦、禹豆麻佐村は千三四百年前に於て弓月王歸化の秦氏が居留せし地點にして日本文明史上の一大聖地とせざるべからず特に平安遷都の際、地を加茂西川河の間にトし太秦村を西邊の市街外に設きしより推測するに彼等は遷都以前に於て早く今の太秦を

中心として西南に居留せしものと言はざるを得ず特に秦氏族中の有力者川勝、酒公、下島の如きもの輩出したる太秦は平安遷都の一引力たることなしとせんや蓋し

(2)太秦民族の人員と當時の帝國臣民の人口とを比較せば思半に過ぐる者あらん姓氏錄に依れば雄略天皇の時秦酒公が山城葛野に聚集せし秦氏は一萬八千六百七十二人九十二部にして其後欽明天皇の朝に於て調査せられたる時に於ても七千有餘戸の人口ありしといへば應神天皇の十六年に於ける百二十七縣即百二十七部の人夫は總數に於て二萬五千人以上なりしや明なり、されば帝國の歷史を遡ること千五百五十年にして吾人の先祖が未だ文明開化の盛時に達せざりし時期に當り、三韓中に於て最も禮讓ある國民として又商工業に長し絹繰を作るを知るものとして第五世紀の支那史家芒曄が後漢書に記載せるの秦人が二萬五千人以上も團體をなして我國に歸化したりとすれば此歸化人民の文明が我國上古の文明發達に貢献せし事の少々にあらざりしを想像し得べき也況んや當時の我國人員は今日の如く增大ならざるを知らば吾人がこの二萬五千人の歸化民を重大視するの理由の如きも自ら明ならん請ふ吾人を以て史學研究上の事大黨とする勿れ、假に當時日本民族の人口を五百萬人とすれば其歸化人の勢力の割合は明治維新の際にペルリーが廿萬人以上の米國人を領率して我國に歸化し、地を東京附近にトして其職業に從事せしに均しかるべし豈に日本史乘の大問題に非ずや更に京都、大阪の地方が商工業に於ても宗教思想に於ても古來最も進歩し二千年來帝王の首府とし日本文化の中心たりしを知らば外人歸化、外國交通の要路の地方としての大阪京都の眞相を了解するを得ん京都大阪の地方が覇權を實業界に有する決して偶然にあらざる也然り而して吾人が茲に論ずる歸化人民の數は秦民に就てのみ言ふもの漢人其他の歸化人を含まざる者と知るべし蓋し秦民族以外のものにしては漢民族十七縣民約四千人を初めとし百濟、任那、新羅の歸化人決して少々にあらざるべしと雖も秦民族の如く旗色鮮明なるものとして長く分立するを得ざりしは欽明天皇の元年八月西暦五百四十年即ち雄略天皇の朝に於て秦酒公をして今の太秦地方に集合せしめし以後七十餘年を經過したる頃の紀事に

八月、高麗、新羅、任那等遣使、獻並修貢職、召集秦人、漢人等諸番投化者、安置國郡編貫

戸籍、秦人戸數惣數七千五十三戸、以大蔵椋爲秦伴造

とあれば秦民族の勢力又秦民族が他と容易に混淆せざりしを知るべき也又彼等が財政の長官として帝國の歴史に表はれたるを知るべきなり

禹豆麻佐と太秦との關係にして上述の如しとすれば吾人は更に秦と波陀との關係を明にせざるべからず即ち

(3) 辰韓を以て秦漢なりとせば何故に秦を辰と發音せざるやは吾人の研究すべき疑問なり、今秦を讀んで「幡多」若くは「波陀」「波多」とする理由如何を考ふるに新選姓氏錄太秦公宿禰の條に

仁德天皇後世以百二十七縣秦民分置諸郡、即使養蠶織絹、貢之天皇詔曰、絹王所、献絲綿絹帛、朕服用柔溫肌膚賜姓波多公云々

とあり又同書秦の忌寸の條に

男眞德王次普洞王云々大鶏鶏天皇諡仁德御世賜姓曰波陀今秦字之訓也

更に古語拾遺を見るに

所貢絹綿軟於肌膚故訓秦之謂之波陀也

とありて姓氏錄と同意を示せり今姓氏錄及古語拾遺著作の時代を考へて以て本問題に對する兩書の效力を示さんに前者は桓武天皇の第五子萬多親王が嵯峨天皇の弘仁六年即ち弘法大師か高野山を開くの前年即ち西暦八百十五年に上りたる著述にし後者は平城天皇大同三年即ち西暦八百〇八年に著述されたるを知らは姓氏錄の說明は古語拾遺の說明を採用したるものと云ふべく然して古語拾遺は聖武天皇天平十四年を去る五十四年欽明天皇の朝を去る二百六十八年雄略天皇を去る三百三十餘年然り而して應神天皇の朝弓月王の歸化の時を去る四百五十年後の著述たるを知らば其の證據としての價値は自ら明ならん、然かも姓氏錄の如き古語拾遺の如きか其百年以前に著されたる書紀、古事紀を訂正して波多を增加し又百廿七縣分散を應神天皇に非ずして仁德天皇するが如き其他禹豆麻佐を以て雄略天皇の朝に歸し波多を以て仁德天皇の御世とするが如き當時何か根據ありし者なるべしと雖も千歲の下古人を墓地に訪ねて其理由を質し吾人と議論を上下する由もなし吾人の解釋力によりて先人か波多を以て肌膚に歸したるを疑ひ本居新井の兩大先生と共に「かくては溫又は軟の言を取るへきも肌を取る

理由なし」と斷言して憚らざるなり然かも吾人は此兩先生等の如く漫然波多を以て韓語なりとして安ずべきものに非ず蓋し吾人は姓氏錄、古事記等に現れたる弓月王の子弟中の普洞王こそ此波多の起因なるべしと信ずるものなり姓氏錄に

大泊瀬稚武天皇諡雄略御世、爾普洞王時秦氏總被却略今見在者十不存一、請遣勅使檢括招集云々搜括鳩集、得秦氏九十二部、一萬八千六百七十九遂賜於酒云々

とあり古事記には蒲東君とあり共に秦民族中の代表的人物即君王の如きものなり、弓月融通の如きは禹豆に關係あるが如く蒲東の如き普洞の如き波多と國音當時に於て相通したるにあらざるか、吾人が漫然烟草の二文字をタバコと讀み洋燈をランプと讀むが如きは大に參考すべき事實なりとす、バタ若くはフドは民族の固有詞なりしに吾人の先祖が主觀的に解して以て秦の遺民とし之に秦の字を充て漫然從來の口語たりし波多若くは普洞を以て之を呼ぶに至りしにあらざるなきを得んや吾人豈濫に說をなすものならんや

以上に於て吾人は秦民族居留地としての太秦村の地を觀察したり以下太秦村の地內の或物を語り最後に秦民の人種を論じて結局せんとす即ち第一に考察すべ

きは

(4) 日本文學に現はれたる太秦なりとす蓋し舊時京都の隆盛を極めし王朝の頃は市街を西に出づれば僅か數分にして達し得べく大宮人の住家よりするも三十分を出てずして達し得べきこの太秦が桂川の上流嵐山の路に横はるに於ては三條の街よりするものも北野神社より迂廻するものも共に太秦を過ぎざるを得ず吾人が第十世紀平安朝の文學に於て太秦の名に接する偶然にあらざる也然り而し其文學に表はるゝ名稱は或は太秦なるべく或は桂宮院なるべく或は楓宮なるべく或は蜂岡寺なるべし、今や第十世紀の文學に於て太秦の名によりてのみ現はるゝものを示さんに

清少納言の物せる枕の草紙に

八月晦日がたに太秦にまうづとて見れば穗に出てた田に人多くてさぬく稻刈るなりけ云々

とあり又それより後百餘年を經過したる更科日記には

世の中むづかしう覺るころ太秦にこもりたるに宮にからひ聞る人の御許より

文ある云々

と又第十三世紀鎌倉時代に在りては吉田好兼法師が徒然草に

この高名のさいわう丸は太秦殿の男、料の御手飼ぞかし、この太秦殿に侍りける女房の名にも云々となりて

當時藤原信清公の官名ともなり居れり又元良親王が太秦に參詣して由緒ある局に遣はし給ひける御歌に

立寄ばちりたつばかり近き間をなど唐の心地のみする

とあるが如き第十世紀頃に於ては早く京都名所の一となり王公貴人の參詣ありしや知るべき也且夫れ文學に現はれたる太秦は參詣の場所立籠の場所として言表はされたるより案ずれば吾人が太秦を論じて太秦寺に及ばずんば吾人の太秦論は不完全たるを免れず、されば吾人は

○(5)茲に太秦寺其他太秦村に在る神社佛閣を語らんとす山城太秦村を見るに太秦寺と離つべからざる關係に於て桂宮院あり、桂宮院中に大辟神社と稱する一座あるを知る、吾人は先づ第一に今の廣隆寺即ち太秦寺の起源を尋ね第二に大辟神社

を尋ねざるを得ず、日本書紀に據れば推古天皇紀に

十一年十一月己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊佛像誰得是像以恭拜、時秦河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造蜂岡寺

と、推古天皇の十一年は西暦六百〇三年にして雄略天皇の禹都麻佐を去る百三十年の長日月を經過したるの時なり此時に當りて河勝が蜂岡寺を立つるに今の太秦村を中心とせる雄略天皇以來秦民族居留地に於てせしや疑ふべくもあらざるなり更に後鳥羽天皇建久年間即ち西暦千百九十年に著述せられたる水鏡は當時の解釋として

この佛誰かあがめ奉るべきとのたまひしに秦の河勝進みいでゝ申しうけ侍りしかばたまはせたりしをはちをか寺を造りてすゑ奉りき、そのはちをか寺と申すは今の太秦なり

としるす第十一世紀に於ては蜂岡寺と太秦寺とが同一物なることを説明するにあらざれば世人が了解に苦しむ程度なりしや知るべき也吾人は秦河勝が蜂岡寺を建立するに當り其先祖秦酒公が雄略天皇より拜領したる葛野郡の一地方に於

てせしことを推定するものなり然かも史に地を酒公に賜ひたるの記事なしと云ふものあらんも雄略天皇と秦酒公との關係を知り且つ其民一萬八千六百七十人を賜ひたるを知れば古代の史家が當時比較的價格なかりし土地の拜領を以て明示するに足らざる者と考へたるまでにして實際に於ては秦民族の住居地太秦村は秦酒公の領地なりしや疑ふべからざるなり夫れ然り蜂岡寺の起源は推古紀十一年十一月の記事に基き其建立は秦氏の領土太秦村に於てせられしや疑ひなしと雖も其落成は之を推古天皇の十一年後に期せざるべからず於是乎或者推古天皇三十一年の記事を根據とし太秦寺の落成を以て三十年とし卅年に落成したればこそ三十一年に舶來の佛像を當寺に納めたりとなす、然かも吾人はこの太秦寺を以て建築に廿年を費したるの大伽藍とも考ふるを得ざるなり更に日本書紀を離れ法然上人源空の師として世に知られたる比叡山の僧皇圓か著作にかゝる扶桑略記に就かば推古天皇の廿四年に左の記事あり

七月新羅王貢金佛像、高二尺、置蜂岡寺、此像放光時々有異、

更に日本書紀を見れば推古天皇二十四年「秋七月新羅遣奈末竹世士貢佛像」とあり

兩者相照らして吾人は扶桑略記の說を採用するものなり蓋し皇圓が僧徒にしてかゝる舶來の佛像安置の如き大切の事に關して名譽を蜂岡寺に歸せしは所謂「利益に反對する證言」として大に信を措くべきものなればなり、されば蜂岡寺は推古天皇の二十四年に於ては既に落成せるや明なり吾人は蜂岡寺を以て推古天皇第十一年以後二十四年以前の建立にかゝるもの斷言して誤らざるを覺ゆ、然るに茲に第二の論者あり今の廣隆寺の地は其推古天皇十一年廿四年の間に建立せられたる蜂岡寺の地にあらず其舊地は今の川勝寺村邊にありしものなりと云ふ、これが根據は太子傳玉林鈔第十一卷の左の文句にあるが如し曰く

廣隆寺緣起云奉爲聖德太子大花上秦河勝所建立、廣隆寺者本舊寺家地九條池原里一坪、二坪、十坪、十一坪、十三坪、十四坪、廿四坪、三十坪、三十四坪、同條荒見社、十坪、十一坪、十四坪、十五坪合拾肆町也、而彼地頗狹隘也、仍遷立蜂岡寺五條荒蒔里八坪、九坪、十坪、十五坪、十六坪、十七坪、並六箇坪之內即施入水陸地肆拾肆町肆段壹佰玖拾貳步也

と夫れ然り今の廣隆寺が蜂岡寺として遷されしは今の地即ち三條の西邊、古の五

條の地なるは明なると同時に其舊地即九條の地が今の七條の西邊に在る川勝寺村に在りしも略之を推定するに難らずと雖も吾人を以てすればそは推古天皇十一年と廿四年との間に於て今の廣隆寺が蜂岡寺として其舊地より遷されて今の廣隆寺となりしときの事を稱して蜂岡寺を建つ云ひしなるべしと信ず、されば推古天皇十一年と廿四年との間に於て今の太秦村に遷されてより千三百年間は其地を變更したるとなきや疑ふべきにあらざる也然り而して葛野の此地方が應神天皇以來秦民族の居留地に充てられたるは吾人が上段に於て辨じたる處なれば寺の前身が或名稱の許に存せしは蓋し事實なるべき也吾人は第五世紀より第六世紀の間廣隆寺が何處に在りしか、九條の舊地は太秦の南約一里の川勝寺村なりしか、之を斷言するを得ずと雖も太秦村と川勝寺村とが千五百餘年秦民族に關係ありし舊地なるを疑はざる也太秦寺にして千三百年來の舊寺とすれば寺內桂宮院中にある大辟神社も亦た蓋し太秦寺と同時に遷されたるものなるべし否な吾人は大辟神社の建立は太秦寺建立前より今の地に在りしにあらざるかを疑ふものなり何故なれば太秦寺は推古太秦十一年に起ると雖も大辟神社は秦民族の先祖秦始皇帝神なりとすれば秦民族が應神天皇の十六年に我國に持來りしものたるや明なればなり太秦廣隆寺緣起に云く

太酒神社明神者秦始皇帝之祖神也

又曰く

此神元是所祭石也

と又更に延喜式を繙かば神名帳上の部に葛野郡廿座の一として

太酒神社(元名大辟神社也)

を掲げたるを見る更に寺內に井あり伊佐良井と呼ぶ其舊井たる疑ふべくもあらず此井は古より神社に屬す、上古以來然りしなり、吾人は寧桂宮院大辟神社が五條荒蒔里にこの井と共に在りしが爲に推古天皇十一年と二十四年との間に廣隆寺をこの地に遷したるものと信ぜんとするものなり、夫れ如此く太秦村太秦寺及其寺內の說明を終りたり結論として吾人は

(6) 所謂秦氏とは何者ぞ

との問題に關して卑見を開陳し先輩諸彥の敎正を乞はずんばあらず吾人を以て

すれば秦民族が秦の始皇帝の遠孫にあらざりしは明瞭なるが如し蓋し秦始皇帝の世は西暦紀元前二百十年にして應神天皇の十六年融通王歸化の時西暦紀元三百六十二年を遡ること實に五百七十二年なり其の間彼等の血統如何にして證明せられしぞ。これ信じがたき第一の理由なり、又日本書紀の記事(上段(1)參照)を細密に觀察するに融通王は百濟より來歸せんとすれども新羅人の拒むありて加羅國に留まる爲め襲津彦を遣したるが如し、されば彼等を百濟人と云ふべくも秦民と云ふ可らざりしが如し又新羅人にあらざるや明なり然り而して悲哉我國の書籍は西暦七百十二年以前のものなし以是この歸化人の性質を觀察せんとするに當り材料を支那、朝鮮に求めざるを得ず即ち西暦紀元前二百年より西暦紀元後五百年頃までの史書としては吾人は史記、前後漢書を有するのみ、しかも史記、漢書に其材料なく僅に後漢書にあるのみ宋文帝の元喜二十二年西暦四百四十五年の著作にかゝる范曄の後漢書七十五卷に於て三韓を說明せるを見るに吾人はかの應神天皇の朝に歸化せし秦民族が百濟を經て新羅に入り最後我國に歸化せしを知ると雖も而かも彼等か百濟人にあらざるを知る後漢書七十五卷に三韓を說明せる

條に

韓有三種、一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁韓、馬韓西在有五十四國、其北與樂浪、南與倭接、辰韓在東、十有二國、其北與濊貊接、弁韓在韓之南立十有二國、其南亦與貊接凡七十八國伯濟是其一國焉、大者萬餘戸、小數千家云々……馬韓最大共立其種、爲辰王、都目支國、盡王三韓之地……馬韓人邑落雜居亦無城郭作土室形如冢開戸在、不知跪拜、無長幼男女之別不貴金寶錦罽、不知騎乘牛馬云々

とあり之を我國に歸化せし秦民に比するに大に相違あると覺ゆ更に進んて辰韓に關する記事を讀むに頗る我國に歸化せし秦民族に類似するものあり曰く

辰韓耆老、自言秦之亡人、避苦役適韓國、馬韓割東界地與之、其名國爲邦、弓爲弧、賊爲冦、行酒爲行觴、相呼爲徒、有似秦語、故或名之爲秦韓、有城柵屋室……知蠶桑作縑布乘駕牛馬嫁娶以禮、行者讓路、國出鐵、濊倭馬韓並從市之、凡諸貿易皆以鐵爲貨、俗喜歌舞鼓瑟、兒生欲令其頭扁、皆押之以石、云々

と若夫れ我國に歸化せし融通王の人夫にして此の記載の人民ならんとせんか吾人の疑問は日本の領土より朝鮮に移り朝鮮より更に進んてこの秦の亡人にして

苦役を避けたる人民とは何ぞの問題となりて支那の領土に移れりこれ吾人が太秦の研究を以て我國文明の性質に關する大問題なりと所以なり今や吾人はこの民族が秦始皇帝の子孫にあらすとするも秦の亡民即ち純然たる支那人なりと斷定すべきや否を考察せんに吾人は彼等か純然たる秦人にあらざるを主張せざるを得ず何故なれば其言語は秦語にあらずして秦語に似たるあるを以て之に秦の一字を附加せしを明言すれば彼等か純然たる支那人にあらざるや亦明なりとす論じて茲に至れば彼等は新羅人にあらず百濟人にあらず秦の始皇帝の子孫にあらず又秦人即支那にもあらずとすれば彼等は果して何者ぞ、史籍寂として聲なく吾人をして空しく太秦の空を眺めしむるもの久し矣然かも吾人は再び太秦村に立歸り其說明を太秦寺境內の一小社に索めさるを得ざるなり、史籍の缺乏は史料なきの意にあらず、吾に情あらば一塊の土尙ほ且つ千萬無量の史蹟を語る、況んや人心集中の極度たる一神社に於てをや

吾人は秦民族として我國に歸化せしこの民族は大辟神社を建立し其側に井を堀りて紀念とし名つけて伊佐良井と稱せし民族なりと斷言す大辟神社とは大辟を

祭る神社なり大辟は廣隆寺緣起に所謂秦始皇帝之祖神也とするものなり或は是石を祭る神社とせるものなり大辟とは何ぞ吾人は之を支那字典に考ふに辟の韻陌なるは君の意にして其の韻錫なるは罪なるを見る前者は神名に適すべきも後者は神名としては人情に反すされば大辟の韻を以て陌の韻とし之を近世に於ける支那音と比較し大辟を以一千四五百年前に於ける今の大闢に均しきものと斷言す、世界國多しと雖も大闢神社を有するものはこれ以て猶太民族に非すとせさるなし大闢はダビデDavidの支那字なり吾人は大辟神社を以てダビデ王を祭りたる神社なりと斷定す秦民族が祭り來りし此神社を以てダビデ王を祭るものとして後始めて上述せる廣隆寺緣起の所謂皇帝の祖神若くは石を祭ると稱する理由を說明するを得べし、彼等の先祖かベテルに石を立てし以來異邦に流寓して石を立てゝ祭を爲すは彼等民族の舊習ならずや、彼等を以て猶太民族と解して後始めて秦始皇帝の子孫傳說の如きも說明するを得べし蓋し彼等か自稱して「大王の子孫にして平和なるもの」とは數千年の昔に於て彼等の先祖の一部分か埃及の昔に於て人に告げたる者として舊約聖書に記するにあらずや上古の朝鮮日本に於て

大王の子孫と自稱すれは之を聞く日本人及朝鮮人か自己の歴史上の智識により主觀的に了解して其所謂大王を自己の知れる大王即秦始皇帝と斷定せるに原因するにあらさるか

更に大闘神社か大酒神社となり大闘神社となりし所以を穿鑿すれは大辟神社かダビデの王の神社たるを知るに足るべし大辟を呼ふにオホサケ若くはオホサキ神社の名を以てす酒避か辟に代りしは訓讀を本位としたるに原因す、然かも之を訓讀してオホサケ若くはオホサキとするは希伯來語に於けるダビデと云ふ固有名詞の意味と附合するは又奇ならすやサキは「幸なり」サケとサキとは同一意義なり而してダビデは「幸せらるゝもの」「愛せられたるもの」等の意義を有す思ふに秦酒公の如きは秦民族に屬せしダビデと云ふ人物なりしなるべし、ことにこの大辟神社の側に伊佐良井の井と稱するものあるに於ては吾人は大辟ダビデ説を主張せるを得ざる也

更に後漢書の記事に立歸り辰韓に於ける彼等に關する傳説の何そ多く猶太人民の口碑舊習に類するものぞ、曰く苦役を他國に避く曰く聚嫁禮を以てす曰く行者路を讓るか如き其他兒の生るや其頭を扁くするに石を以て以て之を押すか如きは猶太民族特有の割禮か支那に説傳したるにあらさるか猶太人か兒の割禮を行ふに石を用ひたるは爭ふへからさる事實なりとすれば其頭を扁にするには蓋し男根の外皮を石に斷切せし割禮の支那に傳はりしものと推定すべきが如し(印度人に扁頭の舊習あるは別なり)最後に伊左良井と支那史乘に表はれたる猶太イスラ、エル人の「一賜樂業」(イヌラエ)(Ezslae)とを比較せば桂宮院内の伊佐良井吾人をして「一賜樂業」の井と解釋せしめざるを得さるなり吾人不學と雖も邦詞の「いさら」か「些細」の意義なるを知り「いさらみつ」(滝水)なる語を知る、彼の堀川次郎百首に現はれたる「岩間ゆくいさら小川のせはしきにわれてや宿を有明の月」の一句を知ると雖も井の固有名詞としてはいさら小井は人情に適せずと信んず若し夫れ源氏物語松風の卷に掲けられたる「いさらゐはやくのことも忘れじを元の主やおもかはりける」の如きは桂院逍遙のときこの太秦村内の出來事に關する歌なれば之を以て直に伊佐良井を普通名詞と形容詞との結合なりと云ひ難きを如何せん、而してこの伊佐良井が古人の疑問となりしは「いさら井のふかくの」ことは知ねとも清水

ゼ家の主なりける」の古歌によりても知るに足らんか更に禹豆麻と云ふ意義を蘊積之貌也と云へる書紀の注解以外に索むれば禹豆は「光」「東」「文化」「開化」の意義を有する希伯來語にして麻佐か「貢物」「賜物」と云ふ意義なるを知る、嗚呼此如き事實に對して尙ほ且つ吾人は太秦は秦の始皇帝の子孫の留居遺跡とぜざるべからざるか思ふに禹豆麻佐は秦民自稱の名詞なりしを時の帝王の公認を經て日本の名詞となりしものにあらざるか吾人先輩の敎正を乞ふ極めて切なり英國の史家(グリーン氏等)は英國の今日ある所以を以て第六七世紀第九世紀に亘りて英國に移往せし猶太民の賜とす豈我國上古の史蹟之に類するもの無しとせんや況んや大阪京都に猶太人的の骨相を有するもの有るにおいてをや吾人は更に第五世紀前に於て支那に入りし猶太民族のあるを知り又唐書貞觀十七年拂ケ波多力遣使の記事を知るこれ豈本論を照すことなからんや吾人敢て先輩の敎を乞ふ

弘法大師と景敎との關係

(ゴルドン者曰く此翻譯文は某文學博士の譯述に係るものなり)

(一名、物言ふ石、敎ふる石)

日英圖書館主唱者　イー、エー、ゴルドン原著

「我れ爾曹に告げん、此輩もし默止せばかの石は直ちに呼號すべし」(耶蘇)

佛敎に關する予が智識は至て乏しく、唯日本在住の間に於て斷片的に學得し、且つ有名なる支那學者に就き、法華の法門を研究したるが、今某大德の需に應じて、覺束なくも一文を草して世に公にする所あらんとす、この支那學者は曾て馬鳴の起信論を譯し、その進歩せる大乘敎理と、耶蘇敎義との間に於て驚くべき同似點を發見したる人なり。予も亦佛敎徒たる諸友の厚意によつて、佛耶の兩敎義を比較し、其間に於て喜ぶべき思想の融和を認めたり。假令語句の間に於て全然同一なるものなく、且つ現時に於ては精確なる歷史上の連鎖を發見すること不可能なる如きも、此兩者の間には眞正なる精神的連鎖の確に存在せることを感ぜざるを得ず。今予は

不幸にして此大問題に關し無智なりと雖も、益進んで之を攻究し、一層深く教理に悟入せんことを希望して止まざることを茲に表白するものなり。

若しその古傳の研究愈進み、兩教聖典の對照その宜しきを得ば、現に不可能視せらるゝ歴史上の連鎖も、遂に發見し得らるべく。從つて夫の精神的連鎖も愈明確なる根據を有するに至り、佛耶兩教徒相互の利益となるべきは明白なり。

我聖書中に云へることとあり「ベレア」の民は小亞細亞の他の都府の民よりも尊し、何となれば彼等は日々聖書を讀み、その事の果して然りしや否やを尋究せりと。凡そ相互の教義を公平明白に、且つ正直に比較攻究することは、兩者相損することなきは勿論、現時最も必要を感ずるは、兩教中眞に精神ある人々が、相互に其寶藏を聞明し、明白に兩者の教義を了解するにあり。何となれば精神界の事物は精神なき人に對しては遂に愚盲不了たるを免る可からざればなり。

予が昨夏此の風光明媚なる勝區に悠遊せる間に於て、最も深き印象を與へたるものありとせば、そは弘法大師の感化の偉大なることにてありき。此に於て予は從來大師に就ては、唯其名の外、殆一切を知らざりしことを愧ぢざるを得ず。然るに今其名の斯くも屢次話頭に上るを聞き且、千百年の後に於て其感化尚民心を支配し種々の方面に於て性格の印象を留めたるを見るに及びては、予は實に大師が如何に慾嘆すべき人傑にして、其性格の如何に強固なりしかを感賞せざるを得ざりき。

我英國の戯曲詩家セークスピーアは說けり。

"The evil that men do lives after them,
The good is oft interred with their bones."

「惡事は行ひたる人の後まで生殘り、善事は多く其骨と倶に葬らる。」

悲むべし、この言は實に社會の實狀を寫したるものなりき。然るに今や然らず、偉大なる「弘法大師」の名は、國民の間にかくまでもその芳香を存せり。

予が始めて大師を知りしは、嚴島――彼の神聖なる、美麗なる內海の一島――にてありき。予は一日、彼の快絕奇絕なる深林を過ぎ、絕壁を攀ぢ、山頂に達して一の巨大なる聖火を見たり。こは實に予が世界周遊中に於て見たる最、奇異なるものなりき。獨木を燃せる此聖火は、弘法大師が千百餘年前支那より歸朝せし時、此地に點火せし以來、曾て滅せざる所なりと云へり。予は此木頭火に耶蘇教のユールログ(耶蘇降誕

祭の木頭火)との間には思想の連絡あるを信ず、此聖火に近く奥の院あり、此に賽して其慢幕及その前の懸燈に於て、叉斧(ダブルアックス)の印章あるを見たり。

この叉斧は實にアリヤン時代以前に於て、地中海のクリート島――紀元前三千八百年アグード、のサルゴン大王の上陸せし島――に於て天神の表章として用ゐられ、天上の鳥を表せしものなりと謂へり。近時ドクトル、アーサー、セー、イヴンス氏がゼウス神(zeus 即太陽神)の生宮と稱せらるゝ岩窟及クノソス(Knossos)の王宮、古來ミノトール(怪牛)の迷宮と稱せられし處)を發掘せし際、この叉斧の印を發見したり。されば この紀章は歴史以前より廣く用ゐられたるものなるべし。

大師も叉筆法に熟し、五筆運用の技を逞くし、假名文字を四十八字の歌となし。

色は匂へど散りぬるを　　わが世誰ぞ常ならむ
有爲の奥山今日越えて　　淺き夢見じ醉ひもせず

"Fragrant flowers are very sweet,
But one day they will fade away,
Who can say, "This world's unchanging"?
Crossidg o'er the mount of changes to-day,
We shall find no dreaming, nor illuson but Enlightenment!

と云へり。

叉茲に京都に來りたるに、幸運にも予は盂蘭盆に會せり。予は實に愉快を以て其奇異なる盆火(Bon fire)を見たり。鳥居、舟、秘密殿、大文字等の光景を平安城を圍める山の斜面に顯はせり。こは恒に世界の漫遊客の怪み見る所なるが、これ亦弘法大師の考案に出でたるものなりと謂へり。千百有餘回の秋に亘りて弘法の遺志の尚年々行はるゝは驚嘆すべき事實に非ずや。予は此に於て暫く埃及三角塔時代死書(The Book of the dead)と、此等の奇習慣との間に於ける關係を示し試みに其連絡を審かんと欲す。是れ予は此點に於て最も弘法なる偉人に興味を感じたるにより、茲に可能的大師の人格に關する一切を闡明せんことを決心したるを以てなり。

大師は曾て千百餘年に於て自ら法を求めて支那に遊學し、當時支那の中心にして首都たる長安に在留したり、此一事のみを以てするも其勇猛、剛邁の氣象を示して餘りあるものと謂ふべし。兩三年客遊の間に於て悉果大阿闍梨に就き密敎を攻究

し、而してその所謂眞言宗――大日の秘敎――を得て歸朝したり、思ふにこの遍照の大日こそ實に嚴島の聖火及京都の標火(Beacon-fire)の根底に横はれる秘密なる可し。大師在唐の間に於て一の秘密を傳受せられ深く之れを心中に藏し、遂に日本國に於て千歲不磨の方法に於て、國民の腦底に印象せんことを計りたるものなるべし。大師は疑ひもなく在唐の間に於て、かの「大光明」(A Great Light)――高きに昇れる旭日の如く國民を覺照し――闇きに坐し死の影に住ふものを照し――平和の道を導く――かの偉人なる光輝を證得したるものなり。而してこの光明を永久的に實現的に國民の眼底に映ぜしめ、人をしてこの祭火を照し經に依りて大毘盧舍那佛――一切處に遍滿せる大日――の敎義を敷衍したり。ヒーブルー人はこの思想をイマニューエル――我と俱に在る神――なる一語に依て言明したり、如是唯一神の實現を感ずるは耶蘇敎に於ては最も貴重なる眞理なり。而して弘法は如何にしてこの美麗なる眞理を學得したるか、予は熱心に之を知らんと欲するも、未だその要を得ず、されども予は切にその實際を發見するの目的を以て歷史的秘鍵を得て、この搜索を遂げんことは最必要なる攻究なるべきを信じて止まざるものなり。

聞く所に依れば日本第一流の學者の一人たる白鳥博士は「東西歷史の示す所に依れば弘法大師が基督敎より、或るものを學びたる點なかるべからず」と云へりと。紀元八百四年に大師が長安に到りし時は――弘法も、傳敎も、俱に企業心に富める遊學者にして、皇命を奉じて入唐し、宗敎の攻究調和を計るべき目的を有したるものなれば――當時長安に於ける第一流の紳士、宗敎家、政治家に會見を求むべきは論を俟たず。事實に於て我々は惠果阿闍梨より祕敎を傳受したることを知れり、その隨學の結果が、弘法の進したる神佛融和主義となりたるを見れば、惠果の事跡に於て尙一層東西史上の連鎖を發見し得べきやも知るべからず。弘法及傳敎兩大師は長安に於て必然彼有名なる大石碑を見たるなるべし、こは兩大師の入唐より僅に二十三年前――紀元七百八十一年――に建てられたるものにして、幅五尺、高一丈の豐碑、上には一千八百七十字の刻文あり、題して「景敎流行中國碑」と云ふ。景敎はネストル僧正の派に屬する耶蘇敎にして、唐太宗の時――紀元六百三十五年――波斯の大德阿羅本及その隨員に依て、支那に開敎せられたるものなり、阿羅本は靑雲を占ふて聖典を戴せ、風律を望んで艱險を亘り、以て傳敎の任を全ふせりと云ふ。唐代の太宗、皇

帝長孫皇后は世界史上に於ける最も英明にして機智に富める二大君主にして、衛軍の威武大に振ひ、王化四方に潤ひ、民心安堵、夜戸を鎖さゞるに到れり。茲に於て帝の注意は文化教育の上に集中せられ、長安に於て一大圖書殿を建設し、二十萬卷の書を藏し、嘗に親ら讀書に身を委ぬるのみならず、凡べての吏人をして自己の讀書修養に務めしむるに至れり。この圖書殿は、その接待室、讀書室と共に精神的修業の中心となり、宗教に關する諸問題も、亦此の館内に於て攻究せらるゝの盛況を示せり其帝立の大學は、その名四方に高く、朝鮮その他の諸國は、その王子等をも送りて就學せしむるに至り、政府に於ては帝國内第一流の人物を網羅するを得たりと謂へり。

此時に方つて、波斯國の大德景教僧の長安の郭外に來るや、英明なる太宗は宰相房玄齡をして儀衛を具して之を西郊に迎へ、宮中に請ぜしむ。皇帝、大臣俱にその聖教を聞き、眞理に悟入せり、景教の經典は、圖書殿に於て譯せられ、新教に關して屢々下問せられ、第一に當時の王公中に景教の傳授せらるゝを見、最も思想あり、精神ある上流の學者及遠來の游學者の間に教化の行はるゝに至りたり。此時に於ても太宗皇帝は、熱心なる儒教者にして、世々盛に行はれたる佛教、老子教には多くの同情を有せざりき。

貞觀十二年秋七月太宗文皇帝の詔勅を景教碑に載せて左の如く記せり。

道無常名。聖無常體。隨方設教。密濟群生。大秦國大阿羅本。遠將經像。以献上京。詳其教旨。玄妙無爲。觀其元宗。生成立要。詞無繁說。理有忘筌。濟物利人。宜行天下。所司即於京儀寧坊。造大秦寺。一所度僧二十一人。(中略)巨唐道光。景風東扇。旋令有司。將帝寫眞。轉横寺壁。(下略)

西安府誌に屬せる長安の地圖には、波斯胡寺の舊跡は尚記載せらるゝを見る。殊に景教碑の記す所の事實の疑ふ可からざるは、豐碑の現存と俱に種々の史跡に徵して明白なるものなり。

この碑文は三一妙身、無元眞王、阿羅訶。(Alolia)即上帝の德を贊するに始まり、創世紀の造物說を述べ、天地人生の創造偏僻する所なきも、惡魔撒彈(Satan)の誘惑に依り空有の論を生し、禱祀の俗を爲し、精神界の混亂を來たし、陰雲常に世を掩ふに至る。茲に於て三一分身、景尊彌施訶。(Messiah)戢隱眞威、同人出代、遂に救世主の出世となり

大秦國に耶蘇の降誕を見る。救主の應現より遂に能事斯畢。亭午昇眞の贖罪の話に移り、二十七部の經(舊約聖書)を留め三一淨風。無言之新教を確立せしを說き、左の教說を立てたり。

一、靈闕、浴水(洗禮)の禮を設けて以て浮華を滌ぎ虛白に返らしめ。
二、十字の印を持して、以て四照を融和し。
三、木鐘を打つ仁惠の音を震ひ。
四、東方を禮して、以て生榮の路に趣き。
五、鬚を存するは外行ある所以。
六、頂を削るは內情なき所以。
七、藏獲を畜へずして、貴賤を人に均くし。
八、貨財を聚めずして、身を貧窮の地置き。
九、食を齋斷するは、識を伏藏する所以。
十、身を禁飭するは、健康を有つ所以。
十一、一日に禮讚七時大に存亡を庇し。
十二、七日一薦心を洗ひ素に反る。

眞常之道。妙而難名。功用昭章。强稱景教。惟道非聖不弘。聖非道不大。道聖符契。天下文明、と更らに景教東來の歷史を述べ、波斯大德阿羅本の入唐、經書の飜譯、太宗の詔勅より景風東遷の事跡を述べ、高宗の時に到りて化風愈揚り、諸州に令して景寺を建てしめ、阿羅本を崇めて鎭國大法主となす。景風十道に遍く、國富み民休し、家に景福を仰ぎしが、武后垂拱、聖曆年間に到りて、釋子の排擠に會ひ、先天年間に於ては士人の誹謗を受け、一時停滯せしも、玄宗即位の後に於ては、五帝の寫眞を寺內に安置し、親ら景寺に臨みて壇場を建立す。法棟再立ち、道名正に復す、天寶の載、波斯の僧(譯者曰、教に佶和と惠果と同人にはあらずやとの疑問を附し置けり。惠果は支那人にして關內道京兆長安縣の人と傳へらるる如何にや。)佶和東來し、同列十七人興慶宮に於て功德を修し天額を賜ふ、肅宗、代宗或は景寺を增建し、或は天香を供し又は御饌を賜ふて景風を宣揚す。德宗の治世に至りては、更に波斯より金紫光祿太夫、同朔方節度副使、試殿中監賜紫袈裟僧伊斯遠く王舍之城より中夏に來り、傳法の事に從ひ、德化大に行はれたる事蹟を述べ、建碑の來由を示せしものなり。

この碑文は景教の僧、景淨(Adam)の撰文にして建中二年に時の法主僧寧恕の配下

を於て建設せられたるものなり。

パーカー教授はその「支那及其宗教」なる書に於て、此碑文に見えたる唐人の名は、皆實際史上の人物たることを證言せり。將軍郭子儀、高力士皆史上に名ある人にして、阿羅本を迎へたる宰相房玄齡は、太宗建國の大半を助成せる人なり。この撰文者たる景淨(Adam)の名さへも、近時高楠博士の發見に依れば、佛教書「貞元釋教錄」中にその名を留めたりと云ふ。

貞元釋教錄(般若傳)卷十七に依れば、景淨は佛教僧と共に佛書の飜譯に從事したりその記事左の如し。

法師梵名般剌若(Prajna)北天竺迦畢試國人也。(中略)乃與大秦寺波斯僧景淨。依胡本六波羅密經。譯成七卷。時爲般若不閑胡語。復來解唐言。景淨不識梵文。復未明釋教。雖稱傳譯。未獲半珠。竊圖盧名。匪爲福利。錄表聞奏。意望流行。聖上(德宗)睿哲文明。允恭釋典。察其所譯理味詞疎。且夫釋氏伽藍。大秦僧寺。居止既別。行法全乖。景淨(Adam)應傳彌尸訶(Messiah)教。沙門釋子。弘闡佛經。欲使經法區分。人無濫涉。正邪異類。涇渭殊流。

而してこの般若三藏は曾て、景淨と共に佛經を譯したるも德宗の爲に非認せられ

更に新組織を爲し譯成したるものは、大乘理趣大波羅密經として一切經中に存す

景淨は建中二年に景淨碑を建て五年の後即貞元二年には如上の佛經連譯を爲したるが、其後二十三年を經て貞元二十年には、弘法大師は入唐して、かの般若三藏に就き、親く梵言を攻究せり。或る學者は般若三藏と稱するもの二人ある如く說けるも、こは全く誤謬に因れるものにて、景淨(アダム)の同譯者たる般若も、弘法大師の請益師たる般若も同一たるは殆ど疑なきものゝ如し。

弘法傳教の長安に着せし時には、市內に四大景寺あり、一大景教碑あり、卓識英邁の資を以て新智識を得るに熱中せる大師其人にして、十字架を冠し異文字を刻せる碑文を見ず、皇帝の御影を掲げ、奇異の樣式を表せる寺院を訪問せざるの理由あるべからず。もし大師にして景教中國流行碑の大榜を見ば、必ずや其何ものなるか、その所謂處女より生れたる彌尸訶(メサイア)とは何ものなるか、その贖罪昇天とは何事なるかを問究めんとするは、勿論先つその寺院に入り、東西の語に通じたる大德景淨に逢ひ、その教義を質問し、且かの「光翼」(神の顯現を表す)の奇標を見て、その說明を求めて、その好奇心を滿足せしめたるは、火を見るよりも明かなり。此光翼の神標

は、大古埃及三角塔の古棺に刻せられ、アッリシャの寺院に彫出せられ、シリアにては耶蘇教に化して、尚この標識を全世界の主宰神を表するものとして用ゐたり。當時支那には、已に六朝百七十餘年間景教は民間に行はれ、全國六人の僧正あり、長安はその首座にして、景淨(アダム)は實にその僧正にてありき。されば種々の方面に於て目に觸れ耳に入るものもありしなるべし、故に碑文以外の事實も大師には知られ、教義の精細も亦探究せらしやも知るべからず。新智識に汲々し、尋究して止まざるは、實に日本學生の特色なり。如此太宗の賞讃を博したる景教の何物たるを知らずして、長安を辭するは、到底眞言、天台の創立者たる兩大師には不可能の事なりとす。(譯者曰、以上數項直寶の處多き故以て略譯してその意を示す。)

日本に於ける眞言宗に大日教義の存在せると、今世紀に到る迄嚴島、京都に於て祭火の相續せるとは、かの奇絶なる石碑の言明せる教綱を見修し、思惟したるの證左なりと信ずるに躊躇せず、その教說とは何ぞや、碑文に云く、

景尊彌施訶(メサイア)同人出世、室女聖を誕し、以て二十四聖舊約の懸記に應し、其教法に依りて家と國とを理し、三一の淨風を設け、無言の新教を立て、正信以て人心を養ひ、八境を制して世道を拓き、塵垢を練つて眞淨を成し、以て三常の門を啓く、生を開き死を滅し、景日を懸けて闇府を照らし、魔妄是に於てか摧破せられ、慈航に棹して明宮に登り、含靈是に於てか救濟せらる、能事既に畢り、亭午登天眞に昇る。

譯者曰、著者は八境は佛教の八戒と同じく、三常の門は盆祭の火の鳥居と同じく、景日は大日にして、慈航は盆祭の舟、明宮は盆火の宮殿に均しく其間相關するものあるが如くに注せり。

弘法大師は支那より歸りて、嵯峨天皇の灌頂、即洗禮を爲したり、即、大日教の秘密に入るを示せるものにして、新約馬太傳(二十八卷、十八—二十)の耶蘇の言を味へばその意義明了なるべし。

天のうち地の上の凡べての權を我れに賜はれり、是故に爾曹行きて萬國の民に洗禮を施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子となし、且我が凡べて爾曹に命ぜしことを守れと、彼等に教へよ、夫れわれは世の終りまで常に爾曹と偕に在るなりと。

大師は又嵯峨帝の命に應じ、十住心論十卷を作りたるも餘りに精細に過ぎ、更に命に應じ秘藏寶鑰(Key to the Secret Godown)三卷を著せりと云ふ。大師に對する信仰は、當に上一人に止まらず、國民の心情を汲引せることは千萬の民衆が、寂後高野山大師靈廟の側に、その終焉の墓碑を建てんと希望せるの一事にても明白なりと謂ふべし。

承知二年空海寂し、凡九十年の後に到り、醍醐帝延喜二十一年に及びて、「弘法大師」の諡號を賜ふ。かの阿羅本に與へられたる「鎭國大法主」「大德」の尊號と妙に相似たるに非ずや、

夫れ天意の秘密は得て知るべからず、かの景敎碑は「物言ふ石」の資格として、日出國より遠來せる學問僧にその敎を傳へ、能事終りて四十年の後一たび土中に埋もれ凡八百年間無言の石たりしは亦奇と謂ふべし。佛國のボーチエーはこの碑文の疑ふべからざるを證明し、且想像して、此の碑文は多分紀元八百四十五年＝會昌五年武宗破佛の亂に埋沒せられたるものなるべしと云へり。然るに千六百二十五年即明の天啓五年に於て偶然に長安の郭外に於て工夫の爲に發掘せられ、その不朽の文字は再び眞理を宣揚し得るに到れり。

馬太傳二十一卷四十二耶蘇云はく

聖書に錄せり、爾曹未だ之を讀まざるか。

「工匠の棄てたる石は、家の隅の礎石となれり、是れ主の行ひ玉へることにして、我れらの目に奇とする所なり。」と

是故に我れ爾曹に告げん、神の國を爾曹より奪ひ、その果を結ぶ民に與へらるべし。

この石の上に墜るものは壞れ、この石の上に墜ればその物碎かるべし。

附錄

西安府の大秦景教流行中國碑

京都帝國大學文科大學教授文學博士　桑原隲藏

あらゆる支那の古碑中て、陝西の西安府に現存する大秦景教流行中國碑ほと、世間の注意を惹いたものは類稀てある。明末に發堀されて以來今日まて、この碑に關係ある著述は實に汗牛充棟て、西洋の方面の著述は大略(一) Heller の『西安府のネストル教碑』に揚けられて居り、(二) Cordier の『支那書史』には一層網羅してある。支那の方面の著述は清の楊榮文の『景教碑文記事攷正』と、(三) Wylie の『西安府のネストル教碑』といふ論文中とに大概備はつて居る。かく關係の著述の多いのは、畢竟この碑か世間から注

意を拂はれて居る證據である。

吾か輩は一昨々年の秋西安に旅行して、親しくこの碑を觀たのみならず、デネマルクの Holm といふ人か遙々西安まて出掛けて來て、この碑の買收を試みたか失敗して、遂に同質同形の模型即ち Replica を造り、之を米國に搬ひ出し、之か爲に支那官憲は狼狽して、景教碑を千年來の所在地てあつた西安府城外の金勝寺から城內の碑林の中に移轉したといふ、この碑にとつては明末發堀以來の大事件、少しく大袈裟にいへは、景教碑の歷史に於て千歲一度とも稱すへき大事件の持ち上つた當時の實際をも目擊した。この緣故から斯に景教碑のことを紹介することにした。

申す迄なく景教とは耶蘇教の一派のネストル教のことて、當時は又ミシヤ教ともいふた。支那の書籍にはミシヤといふ言葉に、彌尸訶(『貞元新定釋教目錄』)彌施訶(大秦景教流行中國碑)または彌失訶(『至元辨僞錄』)なとの字を充てゝ居る。大秦景教流行中國碑は唐の太宗の貞觀九年(西曆六三五)に景教か始めて長安に將來されてから、この碑の建設された唐の德宗の建中二年(西曆七八一)に至る、約百五十年の間の景教の流行の有樣を敍述したもので、之を建設したのは長安の大秦寺の僧景淨、原名 Adam といふ者てある。

この德宗の玄孫に當る武宗は大の道教信者て、會昌五年(西曆八四四)に異宗禁制の令を下した。之か爲に景教も大打擊を受け、大秦寺は廢せられ、景教碑も亦いつとなく佚して仕舞つた。それ故宋秦時代の金石の書物には景教碑を載せてない。所か七百年餘の星霜を經て明末になつて、西安府の西郊の金勝寺の庭內から發堀された。此金勝寺は唐時代の大秦寺か廢滅して

後ち、その空地に移轉して來たもの故、その庭内からもとの大秦寺内に建てられた景教碑が堀り出されても、毫も不思議はないのである。

景教碑の發堀の有樣は(四) Semedo の『支那全史』に詳しく載せてある。その大要は

千六百二十五年(明の天啓五年)に陝西省の首府の西安府の附近で、或る支那人が建物を新築するのに、礎石を置く目的で地面を堀り下げた。所が古建物の下から大石碑が現はれ出た。長さは九 Empan 以上、寛さは四 Empan 厚さは一 Empan 以上に及ぶ。碑の一端はピラミッド形をして居るピラミドの寛さは一 Empan 高さは二 Empan 位あつて、其面に見事なる十字架が刻まれて、その形はメリアブォル市にある Saint Thomas の墓の彫刻のそれによく似て居る

十字架は雲に圍まれて、その下層には三行に各行三個の大漢字が刻まれてある。この漢字は支那に一般に通用のもので、容易に讀むことが出來る。碑の全面には大さこそ相違あれ同樣の漢字、及ひ誰人も讀み得なかつた外國の文字若干が刻まれてある。

この珍奇なる古碑が出土するや否や、關係の支那人等は直に其由を官衙に上告した。知府が現場に出馬して篤と古碑を檢閲して後ち、之を新設の土臺の上に安置し、風雨を蔽ふ爲に其上に碑亭を構へた。併し諸人の觀覽は自由に差許した。

Semedo は漢名を魯德照として知られて居る。彼は西曆千六百二十八年に西安に往き、實地に就きて熱心に景教碑を研究した人である。當時支那在留の宣教師の中で、金尼閣 Nicholas Trig-

ault を除けは、尤も早く景教碑の實物を親覩した人てあるから信用も厚く、景教碑を歐洲に紹介するに與つて力あつた又例の Kircherus 始め、すへての學者は Semedo の記事を證典となし、從ひて歐米の學界ては、景教碑の發堀は西曆千六百二十五年といふに一定して、殆と一人の異議を挾むものかない。併しこの碑の出土年代に關しては、Semedo の所傳以外に少くとも左の三個の異說かある。

(第一)清の錢大昕の錢氏景教考(『金石萃編』卷百二所引)には明の嘉靖年間(西曆一五七三乃至一六二〇)

(第二)清の林侗の『來齋金石考略』卷下には明の崇禎年間(西曆一六二八乃至一六四四)

(第三)明の陽瑪諾の『唐景教碑頌正註』の序には明の天啓三年(西曆一六二三)

この第一第二の異說は固より採るに足らぬけれとも、獨り第三說のみは頗る注意を要するのてある。

陽瑪諾は洋名を Emmanuel Diaz といひ、景教碑發堀の當時浙江省杭州府に居つて、宣教師の中ては尤も早く景教碑の拓本を見得た一人てある、彼は明の崇禎十七年(西曆一六四四)に漢文て景教碑を解釋して『唐景教碑頌正詮』と名つけ、杭州府の天主堂て出版した。その序文にこの碑の由來を述へて

大明天啓三年(西曆一六二三)關中官命啓土于敗墻基下獲之、

と書いてある。三年は或は五年の訛てあるかとも疑はれるか併し當時耶蘇會の出版は鄭重を極め、必三次看詳、方允付梓とあつて、實際この『唐景教碑頌正詮』も陽瑪諾の同會の費奇規 (Gaspar Ferreira 艾儒略 Julius Aleni 孟儒望 Johannes Monteiro の訂閲を經て出版したもので、萬誤あるへしと思はれぬ。

吾か輩か曩に此論文を『藝文』誌上に公にした時は彼の有名なる徐光啓と相並んで當時の耶蘇信徒中の大立者て、其教名をLéonと謂ひ當時の宣教師からLéon Liとして知られて居つた明の李之藻の讀景教書後て謂ふ一篇を引きて陽瑪諾の天啓三年説の傍證としたか、後て考へると肝腎の書後の終末にある日纒參書度の解釋も稍不精確てあることを發見した。且在北京の友人藤田文學士(劒峯氏)から景教碑發掘の年代に就て天啓五年説は必しも唯一絶對とは謂へぬ。已に十年前にエス教會のHavret氏か天啓三年説を紹介して居ることを注意して來られた。(五)Havret氏の「西安府の耶蘇教碑」は西曆千八百九十五年から同千九百二年にかけ、前後七八年に亘り三卷に分つて出版されて、從來世に公にされた景教碑に關する著述の中て最も完備せるものてある。吾輩は曾て東京の學習院て、其第一卷のみを見たことかある第二卷及ひ第三卷は此時まて未た寓目の機會を得なんたのてある。藤田氏の注意に依つて始めてHavret氏の著書を購讀した。いかにも其第二卷に陽瑪諾の序文も李之藻の書後をも紹介して居る。されは吾輩の曩に説きし所は縱令Havret氏のそれとは全く無關係て唱へたにしろ、所謂六日の菖蒲たるを免れない。斯る理由から茲には舊稿を削除して、唯天啓三年説は普通一般の天啓五年説よりも較、信憑すへきことを附言して置く

景教碑か西安の西郊金勝寺の側て發掘されると、その評判は日を經る儘に高くなつて、四方から見物人か來集した。其うちに支那人の耶蘇教信徒もあつた。張賡虞の如き其一人てある、張賡虞は教名をPaulと謂ひ、當時宣教師からはPaul Tshangとして知られて居る。陝西省鳳翔府管下の產てある、景教碑發掘の噂か四方に傳はると彼は親しく西安に出掛けた。當時陝西には

一人の宣教師も滞在せなかつた故、彼は耶蘇教に關係ある人の中で、最も早く景教碑の實物を親睹した人である。彼は此碑の耶蘇教と若干の關係あるを疑ひ其拓本をとつて、浙江省杭州府の住人で信徒中の有力者なる李之藻の手許に函寄した。丁度此時山東の白蓮教徒の彈壓の餘沫として、耶蘇教も禁制された最中で、多くの宣教師は難を脱かれて杭州府に來て(四)李之藻等の保護を受けて居たから、この景教碑の發堀の事情及ひ碑文の内容も直に宣教師仲間に知れ渡つた。この中には陽瑪諾も居つたと見えて、彼は西暦千六百二十五年八月二十三日の日附でこの新事件の大要を羅馬に報知し、併せて李之藻の手を經て、この碑文とその註釋とか明の皇帝の御手許まで捧呈されたことを申添へた。

これか恐くは景教碑の事を歐洲に傳へた最初の報告であらう。尋て親しく西安に滞在して、この碑の研究に力を盡したMedoは、千六百四十年に羅馬に歸つてこの碑の實際に就いて、より正確なる報導を傳へた。彼の『支那全史』の原版は千六百四十一年にマドリッドて發刊されたといふことてある。その後ち千六百五十年に、明朝復興の大使命を帶ひて羅馬法皇の廷に派遣されたト彌格 Michael Boym は、正確なる拓本を歐洲に傳へ、且つその碑文の新譯を試みた。千六百六十七年出版の Kircherus の『支那畫報』は、景教碑を歐洲に紹介するに最も力あつたものたか、景教碑に關する部分はト彌格に負ふ所か多い。以上は景教碑の發堀と、その歐洲に紹介さるゝに至つた大體の歴史てある。

景教碑か歐洲に紹介さるゝと早くも其眞僞に就きて疑惑を挾むものかあつた。それは(五) Kircherus の著書を見ても容易に推測される。碑文の廣く知らるゝに從ひ、之に對する疑惑は益

深く、中にも Voltaire なとは耶蘇教徒の僞作てあるとて手嚴しく非難を加へて居る。宗教界や學界の名士にも、この碑の價値を否定せんとする人か中々多い。この否定論者の中て最も有力なるはミュンヘンの Neumann エールの Salisbury なとてあつた。

(六)前者の論文は『西安の僞造碑』と題して『獨逸東洋協會時報』に收められ、(七)後者の論文は『西安のネストル教碑の眞僞に就いて』と題して『亞米利加東洋協會雜誌』に載せられてある。之に對して景教碑の辯護論者は、一層多いか、中て最も有力と認められて居るのは、巴黎の Pauthier と上海の Wylie とてある。Pauthier の論文は未た見ないか、(八)Wylie の『西安府のネストル教碑に就いて』と題する論文は『亞米利加東洋協會雜誌』に掲けられて居る。

Wylie の論文は主として支那の金石學者、例せは顧炎武とか錢大昕とか王昶とかいふ人達のこの碑に關する考證を紹介し、支那の學者は一人もこの碑の眞物たることを疑ふ者かないといふ事實を基礎として、この碑の價値を保證したのてある。Wylie より三十年餘り後に、オクスフォルドの(九)Legge も『西安府のネストル教碑』といふ著者中に、過去に於ては支那の一人の學者もこの碑の僞作たることを明言したるものなしといふて居る。

併し比較的近代の支那の學者の中には、景教碑の僞作を主張する者もある。陶保廉の『辛卯侍行記』に載せられた錢潤道の如きその一人てある。彼は

此碑宋人金石書未著錄(中略)似明人僞撰、託爲明時出土。

といふて居る。また『皇朝經世文編初續』中に收めてある闕名氏の『天王邪教入中國攷』にも

且僞造大秦景教流行碑(中略)埋西安府城外、佯堀之、以證其教由來之久

と記してある。勿論此の如きは例外で、支那の學者の多數はこの碑の當時の眞物たることを疑はぬ。Wylie, Legge二人の言ふ所も先つ正當である。また支那の史料を調へると疑惑を挾む餘地かないので、殊に近年佛蘭西のPelliot氏が敦煌で發見した『景教蒙度讃』なとは、反對論者に最後の致命傷を與ふへき屈竟の材料である。

ろれは措き、Salisbury なとは景教碑に疑を挾む論據の一として、景教碑か明末清初の際に耶蘇宣教師によつて歐洲に紹介されて以來、今日まで二百年の間に一人も親しくこの碑を覩た人かない、從つてこの碑は目下如何なる狀態にあるかは勿論不明で、碑か今日に現存するや否やすら不確である。今日の急務は中立公平の人を派して、親しく西安に往きて此碑の存否と眞贋とを驗せしむるにある。此事の實行さるゝ迄は景教碑の絶對的價値は斷定し難いといふて居る。

Salisbury の主張は亞米利加東洋協會の容るゝ所となつた。千八百五十二年十月に同協會は次の如き決議をした。

所謂西安府の景教碑の紀事は頗る有益のものなれとも、同時にその眞僞に就きては議論一定せさる故、且つ又十七世紀の後半以來、一個の歐人もこの碑を親覩せさる故、わか協會は目下支那帝國在留中の亞米利加宣教師諸君か適當と信する方法によつて、この古碑を探くり、この現狀を詳に し、新にその拓本をとり、之を學界に寄與せんことを熱望す

決議書は在清の各宣教師の手許に發送された。

この決議は至極結構てあるか、同時に實行には困難てあつた。雍正帝時代の耶蘇教禁制以來、宣教師は縱令沿海地方ては多少布教して居つても、支那內地には踏み入ることか出來なかつた。

勿論當時此禁を犯して內地深く布教に從事した宣教師は絕無ではない。現に景教碑所在地の西安府にもカトリック派の人か內密に布教に從事して居つたか、亞米利加東洋協會は此等の宣教師から所期した寄與を得なんたのてある。然るに千八百六十年の北京條約に依つて耶蘇教の禁制は解かれ、歐人の內地旅行もやゝ自由になつてから、千八百六十六年に Williamson と Lees の二人か長安に出掛けて、始めて金勝寺內の景教碑を親覩した。(十七)其時の有樣は委細に Williamson 氏の「北支那旅行誌」に載せてある。兎も角も十數年前の亞米利加東洋協會の決議の主意は、この二人によつて始めて實行されたのてある。

明末に景教碑か發堀さるゝと、金勝寺の一隅に移され、碑亭の中に安置されたか、碑亭は何時となく廢圮した咸豐九年(西曆一八五九)に韓泰峯といふ者、重ねて碑亭を建てゝこの碑を保護した。併し間もなく回匪の亂か發生して、同治元年(西曆一八六二)の夏金勝寺は燒き拂はれた西安の支那人は多くこの時に景教碑の碑亭も破壞されたといふ。併し Williamson か西安へ往つた時、此碑を親覩して韓泰峯の建てた碑亭は完全に保存されて居つたと明言して居るから支那人の言ふ所は較ち信用か出來ぬ。その六年後の千八百七十二年に(十八) Richthofen か西安の金勝寺を訪ふたか、その時は碑亭の跡形もなくなつて居つた。要するに千八百七十年前後から景教碑は瓦礫縱橫の間に風剝雨蝕に任かすといふ悲境に陷つたのてある。此一事は尠からす歐米人を傷心せしめた。彼等は如何にかしてこの世界稀有の古碑を完全に保護せんと工夫をした。Balfour や Lacoupérie の如き學者は前後して「タイムス」紙上に、英國の外務省か支那政府に交涉して、景教碑を英國博物館に引き取るへしといふ希望を披瀝した。中にも支那

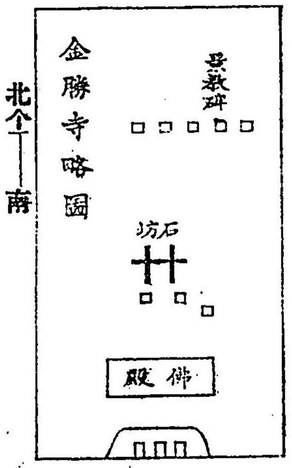
宣教師の一人なる、(十) Stevenson は千八百八十六年九月の「タイムス」に手嚴しき書を寄せた。

世界に遍ねく其名を知られたる景教碑を、自然の破壞と人爲の毀損とに對して何等保護する所なく、かく荒蕪の間に暴露せしめつゝあるは、實に十九世紀の大耻辱にして又不面目といはねはならぬ。吾人はわか當局者か然るへき手腕家を派遣して、北京の支那官憲に說き、この貴重なる古碑を英國博物館に轉交して安全なる保護を講することに同意せしむるやう盡力せんことを衷心より希望するのである。若しこの計畫實行し難しとならは、在北京の外交團諸君の盡力により、支那官憲に勸めて、責ては一の碑亭を建てゝこの碑を保護せしめたし今日に當りて何等かの方法を講するにあらすんは、無二の景教碑も早晚世に佚するに

至るへし

多分この說に動かされて、在北京の外交團は總理衙門に說き、總理衙門も外交團の勸告に聽き、銀百兩を支出して碑亭を作らしめた。これは千八百九十一年のことてある。併し例の支那一流の中飽の結果、實際出來上つたのは僅か五兩位の至極粗末な建物てあつたとかで、一年經過せぬ間に碑亭は風に吹き倒されて、景教碑はもとの赤裸々の狀態となつた。ベルリンの(十一) Fu-ke 教授かその翌年の五六月の交、西安に旅行した時には、碑亭は已に跡形もなかつたといふて居る。景教碑はこの後吾が輩の西安に旅行した頃まて依然其儘の狀態にあつた。

吾か輩は明治四十年の秋に宇野文學士と同伴で、洛關の游を試むることゝなり、歲の九月三日に燕京を出發し、長驛短亭の間に半個月を過ごし、月の十九日に西安に入り、越えて七日、九月の

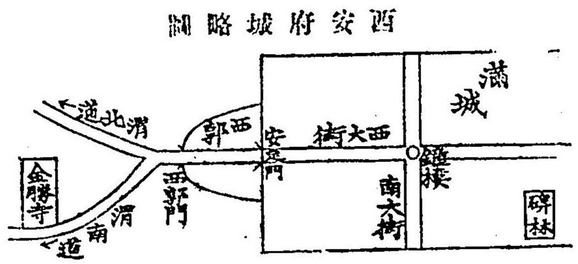


寺とはその通稱である。寺は同治元年の回匪の亂に兵燹に罹つて、今は實に荒廢を極めて居る。併し境内は流石に廣く、南北二町半、東西一町半の間、頽墻斷續といふ有樣で、幾分往昔の面影をしのばしめる。今の佛堂は兵燹後の再建て見る影もないが、その後庭にはもと本殿の在つた所と見え、廢磚殘甓累々たる間に、明の萬曆十二年に建てた精巧なる一架の石坊か遺つて、祇園眞境と題してある。其前面に明の成化、嘉靖頃の碑三四、何れも寺の由來を誌したものかある。石坊の後卽ち北の方約半町許

二十六日に金勝寺に往きて景教碑を探望した。

金勝寺は西安の西郭外約三清里の處にある。唐宋時代には崇聖寺、明清時代には崇仁寺といふ。金勝

に、隴畝の間に五方の碑かあつて、東より第二番目か所謂景教碑である。その他のものは大抵乾隆以後で、やはり寺の由來を誌したものか多い。



景教碑には碑亭かない。自然人爲の迫害に對して全然無防禦てある。この碑を世界無二の至寶と尊重して居る西洋人が、かゝる現狀を見れは、その將來に就きて心を傷め、さては之をその本國に移さんと騷くのもあなかち無理てはないと思はれた。

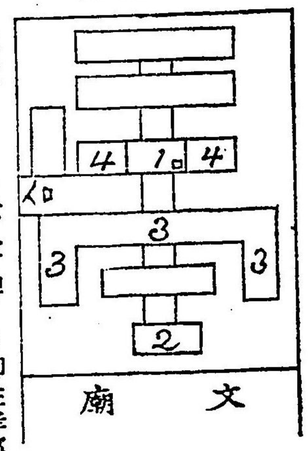
景教碑探望の翌々日に咸陽、乾州、醴泉方面に約一週間程旅行して、十月四日の午後西安に歸る時、西郭て十數の苦力か一大龜趺を城内に運ひ行くのに出遇つた。前途を急きし故、別に問

ひ質しもせず、其儘寓居に歸着した。

その夜在西安の日本教習の話に、近頃一洋人か金勝寺内の景教碑を三千兩に買收して、之を倫敦博物館に賣り込む計畫に着手したのを巡撫か聞き知つて大に驚き、俄に景教碑を碑林に移し、その拓本をとるすら官憲の許可を要するなと、警戒頗る嚴重となつたと聞いて、途中て目擊した龜趺はその古さといひ、その大さといひ、必す金勝寺の景教碑のそれなるへしと思ひ當る儘、越えて十月六日の朝、碑林に出掛けて驗へると果して事實て、景教碑は碑林中に据ゑ付け最中てあつた。吾か輩は兎に角千年來の所在地てあつた西安と景教碑との因緣のまだ銷盡せないのと、また景教碑か碑林に移されて、支那官憲の保護を受くることとなつたに滿足して歸寓した。

吾か輩は十月九日に西安を出發して歸途に就いたが、十月十二日の午後、敷水鎭附近て道の彼方に特別製の大車を目擊した餘程の重量のものを塔載したと見え、七八頭の馬匹て進行に惱んて居る。趕車的に問ひ質すと、何ても洋人の僞造した石碑を

碑林略圖



1 景教碑
2 御注孝經
3 開成石經
4 孟子

西安から鄭州まて運搬する所てその運搬を引き受けたのか彼の朋友てあるとの事、吾か輩の腦裏には直に西安の景教碑の一件か浮ひ上つた。

さるにしても此の如き石碑をいつの間に模造したか、又その模造の石碑はいかなる程度まて原物に似寄つて居るかと、種々好奇心か起つたけれとも、生憎連日の降雨て淤泥膝を沒するばかり、その上、石碑は蓆包堅固て、實質を驗べることは困難のやうに見受けたれば、遺憾なから割愛し

て前路を急き、十月の二十八日に北京に歸着した。

越えて明治四十一年一月に在上海の宇野文學士から書狀が來て、その中に Han Kou Daily News に據ると西安の景教碑の買收に關係あつた洋人といふは、Danish Journalist と稱する Fritz von Holm 其人であると書き添へてあつた。吾が輩の西安旅行の途次、九月十四日に閿鄉縣の公館の大王廟に投宿した所が、廟主の曹永森といふ道士が二片の名刺を見せた。一は日本陸軍歩兵少佐日野强とあつた。即ち『伊犂紀行』の著者である。一は大丹國文士何樂模とあつた。この何樂模が疑もなく Holm 氏のことだ。大丹國文士とは Danish Journalist の譯、何樂模は即ち Holm の譯である。

要するに吾が輩の西安旅行は、景教碑の買收若くは模造の爲め、西安に出掛けた Holm 氏と終始したので、往路では偶然其人の

名片に接し、西安滯在中はその人との因緣深き景教碑の移轉を目擊し、歸途ではその人の模造品の運搬せらるゝのに出遇ふとは、實に不思議の緣といはねばならぬ。

Holm 氏に關する記事はその後ち Shanghai Times にも載せられて、内外の注意を惹くに至つたが、是と同時に在留外人の間には碑林に移轉された景教碑の眞僞に就きて疑惑を挾む者が出來た。Holm 氏が態々歐洲三界から出掛けて、幾多の金錢と勞力とを費しながら、一模造碑 Replica のみに滿足して歸る筈はない。黄白に目のない支那官吏を買收するは容易のことである、碑林へ移されたのが Replica で Holm 氏の持ち出したのは原碑に相違ないと主張する者が多い。

かゝる風説の高まるに從ひ、支那政府も大分心配し出した。漢口の稅關にその差押へを命したとか、調査の爲に官吏を派遣

したとか蜚語紛々といふ有樣を呈した。支那の學者達も安心出來ぬと見え、學部の陳毅君などは態々わか寓居に駕を枉けて意見を徵された。幾多の在留日本人からも同樣の質問を受けた。併し之に對して吾か輩は何等の決答を與へ難い。實をいふと吾か輩は後日かゝる問題發生すへしとは豫期せなんた。碑林に移轉中の景教碑は見たけれとも、かゝる疑惑に答へ得るほと注意して檢査はせぬ。Holm 氏の持ち出した所謂 Replica には出遇つたけれとも、その實質は檢査せない。口では碑林の景教碑の原物たるへきを唱へつゝも、心てはその反對說を排するたけの積極的確信を缺いて居つた。

四十二年の二月に北京を出發して南清に轉學した際に、漢口や上海の日本領事館てもこの景教碑の話か持ち上つたか、何等の解決を得ぬのみか疑惑の雲は寧ろ一段の深きを加へた。

吾か輩は其後間もなく歸朝して、京都文科大學に奉職すること成つたか、同し年の秋に同僚の上田教授に勸められて丸善の書店に出掛けた所か、新着の(十二)Holm 氏の『ネストル教碑』といふ一小册かあつた。Holm 氏は餘り學問のない人と見えて著書は詰らぬけれとも、Holm 氏自身か關係した景教碑の出來事を書いてあるから、吾か輩にとつて中々面白い。

その著書に記する所に據ると、Holm 氏は景教碑を模造し若し、出來得へくは原碑を買收する目的て、倫敦、紐育て資金を集め、千九百七年(明治四十年)の春に米國より支那に渡り、五月二日に天津を發足して、その月の三十日に西安府に到着した。翌六月十日には金勝寺に往きて親しく景教碑を驗へ、原碑の買收に全力を盡したか、到底成效覺束なしと見て、更にその模造に取り掛つた。彼は石匠を招いて、原碑と同大同質同量の模造碑 Replica

を百五十兩て受負はせた。石匠は富平縣から同質の石材を切り出し、四人の石工て十一日間に仕上けて仕舞つた。質は黑色の石灰石て、重さは二噸ある。模造碑と原碑とは一寸區別に苦しむ程見事に出來上つたとて、Holm氏は今更なから支那石工の技倆に舌を捲いて居る。

十月三日にこのReplicaを運ひ出す計畫て、その前日の十月二日に準備の爲め金勝寺に出掛けた所か、この日意外にも官命により原碑を碑林に移すといふ事件か持ち上つた。景教碑の移轉は十月の二日から四日まて前後三日間に跨つたと見える。

吾か輩は醴泉からの歸途に龜趺の運搬さるゝを目擊したのはこの最終日の出來事てある。後て北京の支那官吏に聞いた所によると、景教碑の移轉は支那政府か洋人の買收運動を聞き、陝西巡撫に電命を下した結果て、法部の董康君なとの主張に本ついたとのことてある。

Holm氏は十月三日にReplicaを特別製の馬車に載せて鄭州に送り出し、鄭州から京漢鐵路て漢口まて運んたか、漢口の稅關て差押へられた。Holm氏自身北京に出掛け、總稅務司の赫德Robert Hart氏に談判して差押を解除して貰ひ、漢口から汽船て米國に送り、今は紐育の博物館に安置されてある。二三十年前から唱へられた、景教碑を英國博物館に移すへしといふ議論は、今日そのReplicaを米國の博物館に藏すといふ結果を生んた。

元來景教碑は明末發掘の當時からReplicaか作られたと謂ふ說かあつて、今世に喧傳されて居る金勝寺の景教碑は明末に作られたReplicaて、果して唐代の眞物てはないと主張する人もある。吾輩は明末のReplicaの有無論の如きは固より齒牙に掛くるに足らぬものとして居るか、唯今回碑林に移された景教碑

の眞僞に就ては絶えず不安心を感して居つたHolm氏の著書を讀んで始めて二年來の疑團も氷解し胸裏自から清爽を覺えた。支那の學者達に之を聞かせたら一層の滿足を表するに相違ない。

○參　　照

(一) Heller; Das Nestorianische Denkmal in Singanfu, s. 438–441(Graf Széchenyis Ostasiatische Reisi, Band II)

(二) Cordier; Bibliotheca Sinica, Volume II, col. 772–781.

(三) Wylie; The Nestorian Tablet of Se-Gan Foo. p. 289–300(Journal of the American Oriental Society, 5th Vol.)

(四) Semedo; Histoire Universelle de la Chine, p. 227.–228.

(五) Kirchere; La Chine Illustrée, p 1.

(六) Neumann; Die erdichtete Inschrift von Singan Fu, S. 33–43 (Zeitschrift der Deutschen morgenländischen Gesellschaft. Vierter Band.)

(七) Salisbury; On the Genuineness of the so-called Nestorian Monument of Singan Fu, p. 399–419 (Journal of the American Oriental Society, Third Volume.)

(八) Wylie; The Nestorian Tablet of Se-Gan Foo, p. 278–336.

(九) Legge; The Nestorian Monument of Hsi An Fu, p. 37

(十) Lacouperie; Beginnng of Writing in Central and Eastern Asia, p. 84,–85.

(十一) Forke; Von Peking nach Chang-an und Lo-yang, s. 70(Mittheilungen des Seminar für Orientalische. Sprachen. Jahrgang I)

(十二) Holm; The Nestorian Monument.

(十三) Richthofen; China, Band I, s. 553.

(十四) Huc; Chrstianity in China, Tartary, and Thibet. Vol. III p. 275–278.

(十五) Havret; La Stèle chrétienne de Si-ngan-Fou.

(十六) 田中の國天寶十りの羅馬法王に送書セル文書(古文獻叢書十一編八巻及四巻)

(十七) Williamson; Journeys in North China, Manchuria and Eastern Mongolia. Vol. I. p. 381–383

(十八) Gibbings; Introduction to Mosheims authentic memoirs of the Christian Church in China.

PREFACE.

" The darkest place is the foot of the lamp. " The Nestorian monument in China, famous as it is in the West, is not so well and widely known in the Far-East. This is strange enough but can be easily accounted for. It was only in the year 1817 that the Nestorian inscription itself was for the first time made known to the Japanese. In that year, many books were imported from China and among them was a book compiled by Wang Ch'ang (王昶) in 1805 called "A great Collection of inscriptions on stone and metal," which contained the famous Nestorian inscription in the sixty-fifth volume. But the sagacious Kondo Seisai (近藤重藏正齋先生) was the "Inspector General of Publication and imported books" at that time. As soon as he read the Nestorian inscription, he conclud -ed it had something to do with "the religion of Jesus" which was strictly forbiden by the Shogun's law, and he consequently declared the whole book by Wang Ch'ang prohibited in Japan.

Thus it came about that nothing had ever been known about this famous inscription in this country until the year 1876, when Dr. Taylor's Chinese book called 天道溯源, which contained the Nestorian inscription, was published by the London Bible and Tracts Society with the Japanese

reading marks added to the Chinese text. The work was done by the famous Dr. Nakamura Keiu (文學博士中村敬宇先生) but as he did not express his views on it, the inscrip-tion still remained unstudied by the Japanese scholars at large, and is only recently that fresh attention has been directed to it by two of our learned professors—Dr. J. Takakusu, Professor of Sanskrit and Pali at the Imperial University of Tokyo, and Dr. H. Kuwabara, Professor of Chinese Classics and Oriental History at the Imperial University of Kyoto. In the year 1896 Dr. Takakusu published in the Journal called Toung Pao (通報) the very article in English which we have been honoured by his kind permission to put in as an appendix to this book. He had discovered the name, *King-tsing* 景淨, Adam, the Persian priest who composed the inscription, in the Buddhist Sûtra while he was associated with Professor Max Müller at Oxford in translating a certain work.

More than fifteen years passed since he wrote this article, but his article, short as it is, speaks volumes as to the genuiness of the stone itself. Every work on the Nestoran monument in China after 1897 by the European as well as the American scholars contains some quotations from this article—from Havret (1897) down to Laufer (1911.) Indeed without reference to his work the study is not complete.

On the other hand, Dr. Kuwabara saw the very

stone at the very spot. As he is so well versed in Chinese literature and history, it goes without saying that his descriptions of the monument and his observations on the inscirption are very valuable while his bibliography is complete. He published it first in the "Gei bun" the organ belonging to the College of literature of the Imperial University of Kyoto. He too kindly gave me permission to add his article to mine after he himself had painstakingly corrected it.

With these two articles by the Japanese professors besides the interesting article "on Kobo Daishi and the Nestorians in China" by the Hon. Mrs. E. A. Gordon, who set up the replica of the Nestorian monument at the top of Mt. Koya—the holy land of Japan on the 27 th of Sept. 1911, the author may honestly say that this book, small as it is, contains almost all that has been written about the Nestorian monumeut either by the Japanese or in Japan.

Many valuable hints and suggestions have been received from Dr. Margoliuth, Professor of the Syriac language and literature at Oxford, Mrs. Margoliuth, the authress of Dictionary of the Syriac language, Dr. Taka kusu, the Hon. Mrs. Gordon, Mr. Takakuwa and others.

If the book rouses in any way interest to study the famous inscription and serves to encourage the study of

the relation between the Buddhism and the Nestorianism in China, credit is mainly due to these persons who kindly helped the author directly and in directly. For the shortcomings and failures of this book the author is alone responsible and sincerely begs lenient overlooking of them on the ground that this is the first book in which the whole subject has been treated in Japanese.

P. Y. Saeki, the author.

Ushigome, Tokyo.

The Name of "Messiah" found in a Buddhist book; The Nestorian Missionary Adam, Presbyter, Papas of China, translating A Buddhist sûtra.

By

J. Takakusu, M. A., Ph. D.

The first Nestorian missionary Olopun and his associates went to China in A. D. 635. Favourably received by *T'ai-tsung*, the then ruling emperor of the T'ang Dynasty, he was engaged in a mission work in the city of Ch'ang-ngan (Si-ngan-fu).

In A. D. 781 that famous Nestorian monument with a Syro-Chinese inscription, of which a vast literature has been produced in Europe and in America, was erected to commemorate the diffusion of Christianity in China. The Syro-Chinese composition was made by a Persian missionary, Adam, presbyter and chor-episcopos, and Papas of China, whose Chinese name, as the inscription shows, was *King-tsing* 景淨 of the *Tâ-ts'in* monastery 大秦寺.

This monument had long been buried in the ground, until in 1625 it was dug up and the inscription was brought to light. Many facsimiliæ and translations were since produced, the genuiness of the inscription was questioned and once it was almost attributed to a Jesuit fabrication. At last its genuiness was completely established by the two able scholars, Mr. Wylie and M. Pauthier, who handled the subject by a series of discussions, based on the concesus of Chinese antiquaries and a great variety of historical, biographical and topographical notices in its details, and elucidated every point by a fulness of evidence which leaves nothing more to be desired. They were followed by Dr. Legge of Oxford who, in 1888, published a new translation of the inscription and a lecture on the monument; he also found a confirmation as to its genuiness from other sources.

Now the same Adam=*King-tsing*, who erected the monument, is mentioned again in a Buddhist book, which in a way gives light on the activity of the Nestorian missionaries in China. While I was referring to the Buddhist canonical books of China, the other day, I came across a book called

the "Chêng-yüan Sing-ting-Shih-kiâo-muh-luh." 貞元新定釋教目錄, i. e. "The New Catalogue of (the books of) the teaching of Sâkya in the period of *Chêng-yüan*" (A. D. 785—804) compiled by *Yuen-chao* 圓照, a priest of the Si-ming monastery 西明寺 of the Western Capital (Singan-fu). For this book see Bodleian Library, Japanese 65[DD], Vol. VII, fol. 5*v*°. In this I found a passage relating to the Nestorian missionary which I translate as follows:

"Prajña, a Buddhist of Kapiśa, N. India, (法師梵名般剌若, 北天竺境, 迦畢試國人也) travelled through Central India, Ceylon, and the Islands of Southern Sea (Sumatra, Java etc.) and came to China, for he heard that Mañjuśrî was in China.

He arrived at Canton and came to the upper province (North) in A. D. 782. He met a relation of his in A. D. 786, who came to China before him. He translated together with *King-tsing* (= Adam*), a Persian priest of the monstery of Tâ-tsin (Syria) the Śatpâramitâ-sûtra (大乘理趣六波羅密經) from a Hu (胡) text, and finished translating seven volumes.

But because at that time Prajña was not famil-

iar with the Hu language nor understood the Chinese language, and as *King-tsing* (Adam) did not know the Brahma language (Sanskrit), nor was versed in the teaching of the Sâkya, so though they pretended to be translating the text, yet they could not, in reality, obtain a half of its gems (i. e. real meanings). They were seeking vain glory privately, and wrongly trying their luck. They presented a memorial (to the Emperor), expecting to get it propagated.

The Emperor (*Tê-tsnng*, A. D. 780—804), who was intelligent, wise and accomplished, who revered the canon of the Sâkya, examined what they had translated, and found that the principles contained in it were obscure and the wording was diffuse.

Moreover*) the Sanghârâma of the Śakya and the monastery of *Tâ-tsin* (Syria) differing much in their customs, and their religious practices being entirely apposed to each other, *King-tsing* (Adam) ought to hand down the teaching of **Mi-shi-ho** 彌尸訶 (Messiah), and the Śakyaputriya-Sramans should propagate the sûtras of the Buddha. It is to be wished that the boundaries of the doctrines may be made distinct, and the followers may not inter-

mingle. Orthodoxy and heterodoxy are different things just as the rivers *King* and *Wei* have a different course."

乃與大秦寺波斯僧景淨依胡本六波羅密經譯成七卷. 時爲般若不閑胡語,復未解唐言,景淨不識梵文,復未明釋敎. 雖稱傳釋,未獲半珠,圖竊虛名,匪爲福利. 錄表聞奏,意望流行,聖上濬哲文明,允恭釋典,察其所譯,理昧詞踈. 且夫釋氏伽藍,大秦僧寺,居止旣別,行法全乖,景淨應傳彌尸訶敎. 沙門釋子弘闡佛經,欲使敎法區分,人無濫涉,正邪異類,涇渭殊流, **vide** 貞元新定釋敎目錄 [Japanese Tripitaka, t'ao 結 XXXVIII 7th fasc., p. 5 *verso.*]

So far the extract from the book of Yuen-chao. As to the identity of Adam with *King-tsing* there is no doubt whatever, as the parallel texts of the inscription clearly show.

It is very interesting to have this little contemporary notice of the Nestorian from a Buddhist source. Christianity of China, as Gibbon remarks in his famous history, in the 7th and 13th century is invincibly proved by the consent of Chinese, Arabian, Syriac and Latin evidence. In addition to these we have now a reference made by an eye-

witness in a Buddhist work. It was under the Emperor Tê-tsung (A. D. 780—804) that *King-tsing* (=Adam) had erected the monument, and under the same Emperor, he was recorded to have been translating a Buddhist Sûtra. I have some doubt as to whether the translation took place before the erection of the monument or after it, though from what we have in the above extract, the translation seems to have been made after the inscription. (Pranjña came to the upper province in A. D. 782, while the monument was erected in A. D. 781. But the year in which they were translating the Buddhist book is not given).

But their united work seems to have been stopped by an Edict, no doubt as a result of jealousy of Buddhist priests. *Te-stung*, the ruling Emperor, was claimed as patron by both Buddhists and Nestorians, and was praised by both sides. It might have been so, as such has often been the case in China as well as in India. If we compare the statements of both sides, we can easily understand the Emperor's attitude toward religions of his time. I may find another occasion for entering into this question.

Adam on his part seems to have adopted many Buddhist terms in expressing himself.

In the inscription we find a number of Buddhistic expressions (He used the Buddhistic words for "monastery," "priest" etc.) or ideas, as Dr. Edkins has already remarked. This fact can now be explained as the result of *King-tsing's* study of Buddhism, for we have the evidence that he was engaged in translating Buddhist works.

It is most natural for him to be anxious to get a knowledge of Buddhism in order to learn right religious terms for expressing himself to the people.

As to the characters representing "Messiah," the phonetization is exactly the same as that of the inscription, 'shi' 施 only of "Mi-shi-ho" being a different character of the same sound.

We should like to know what had became of the book which Adam was translating. That sûtra is indeed preserved in the Buddhist Canonical books, but it is ascribed entirely to his colleague Prajña (see No. 1004 Nanjio, catalogue of the Chinese Tripitaka).

Whether or not the translation is the same as that which was made by *both* we cannot tell.

For the students of the Syro-Chinese inscription and of the early missions of China, it may be worth examining this special sûtra, for it may throw some light on the composition of that singular inscription.

330
343

著發者 佐伯好郎 東京市牛込區新小川町二丁目十三番地
印刷人 白土幸力 東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者 三光堂 東京市神田區美土代町二丁目一番地

不許復裝

發賣所 東京神田區今川小路二丁目十七番地 書肆芳成堂
發行兼發賣所 東京市神田區北神保町八番地 待漏書院

明治四十四年十二月十日印刷
明治四十四年十二月十三日發行

景教碑文研究奥附
定價金貳圓

335
343

020608-000-4

335-343

景教碑文研究

佐伯　好郎／著

M44

ABI-0423